橘氏家系図

橘姓土橋氏系書

橘氏

中橋氏

掛橋氏

土橋氏

井石氏

土橋氏

橘姓 肥前圭橋氏流 家系図

第30代天皇 敏達(ﾋﾞﾀﾂ)天皇(538-585) 古墳時代

父.第29代 欽明天皇、皇后.石姫皇女(ｲｼﾋﾒﾉﾐｺ/ｲｼﾋﾒﾉｵｳｼﾞｮ)の第二皇子。皇居を現在.奈良県桜井市へ遷す。仏教が伝来した時代でその受容を巡り、崇仏派の蘇我、廃仏派の物部両氏が対立す。敏達天皇は廃仏派寄りで、物部守屋を大連(ｵｵﾑﾗｼﾞ)とし蘇我馬子を大臣とした。弟である用明天皇が31代天皇として即位、その子に聖徳太子。

↓

難波皇子(ﾅﾆﾜﾉﾐｺ)(560頃-587)

父.第30代 敏達天皇、妃.春日老女子(ｶｽｶﾞﾉｵﾐﾅｺﾞ)の第一皇子。蘇我氏、物部氏戦争で、蘇我方として蘇我馬子や従弟.聖徳太子と参軍し戦死したものと考えられる。自身は若くして亡くなった可能性が高いが、数多くの氏族の先祖となっており皇室にその血脈は受け継がれている。

↓

栗隈王(ｸﾘｸﾏﾉｵｵｷﾐ)(不詳-676) 飛鳥時代

贈従二位(公卿)。難波皇子第一子、橘諸兄の祖父。671年、筑紫率、大宰帥として唐と新羅の使者を送迎、兵政長官。672年、壬申の乱(古代日本最大の内乱)に於いて、近江宮の勅令による筑紫大宰からの派兵要請を、筑紫国は外(朝鮮)に望んで国を守るのが使命であり内の賊の為ではないとし勅令を断る。

※ 肥前国には、栗隈王を日本の水の中に住んでいる動物を取り纏める人であったとし、その子孫の神主が河童に慕われるという昔話がある。

↓

美努王(ﾐﾇｵｳ/ﾐﾉｵｳ)(不詳-708)

左京大夫、摂津大夫、治部卿を歴任。父.栗隈王、兄.武家王と共に大宰府に赴く。父と共に近江朝廷の使者による大宰府での徴兵を拒絶。681年、川島皇子らと「帝記及び上古の諸事」の記録、校定に従う。685年、京畿内の兵器校閲使者。694年、大宰帥に任じられ再び筑紫に下向。妻.三千代は同行せずその期に藤原不比等の後妻となる。701年、造大幣司

長官、摂津大夫、708年、治部卿となり薨去(ｺｳｷｮ)。

※ 美努王の妻.県犬養三千代(ｱｶﾞﾀﾉｲﾇｶｲﾐﾁﾖ)、のち橘三千代(665-733)
贈正一位(公卿)。皇親.美努王の妃、葛城王(のちの橘諸兄)の母。第40代 天武天皇から41代 持統・42代 文武・43代 女帝元明・44代 元正・45代 聖武までの六代の天皇に仕える。694年、美努王が筑紫に下向し離縁後、藤原氏始祖.不比等(ﾌﾋﾄ、中臣鎌足の子)と婚姻。708年、藤原の家に入らず朝廷(元明天皇)より橘の姓(ｶﾊﾞﾈ)を賜る。橘姓を賜りし元明天皇の勅に「(橘の)柯(ｴﾀﾞ)は霜雪を凌いで繁茂る」とある。のち病治癒祈祷のため出家す。美努王との間に葛城王(ｶﾂﾗｷﾞｵｳ、のちの正一位 左大臣 橘諸兄)と佐為王(ｻｲｵｳ)。不比等との間に第45代 聖武天皇の皇后で光明皇后(東大寺、国分寺、正倉院の建立に関わる)、その子(三千代の孫娘)に第46代 孝謙天皇(再び位に就き48代称徳天皇となる)あり。733年、68歳薨去。

↓　橘氏

橘氏始祖 橘諸兄/葛城王(ﾀﾁﾊﾞﾅﾉﾓﾛｴ)(684～757) 飛鳥/奈良時代
初代橘氏。正一位(公卿)、左大臣。天平八年(736年)11月9日、皇族の位を辞して弟.佐為王と共に臣籍降下し聖武天皇より外家ノ橘姓を下賜さる。葛城王は橘諸兄、佐為王は橘佐為とあらたまる。橘姓を賜りし祝宴にて第45代 聖武天皇(および光明皇后)より賜りし御製歌（ｵﾎﾐｳﾀ）一首、「橘者 實左倍花左倍 其葉左倍 枝尓霜雖降 益常葉之樹（橘は、実さへ花さへその葉さへ、枝に霜(ｼﾓ)降れど、いや常葉(ﾄｺﾊ)の木）」(万葉集第六巻1009番歌)。11月17日、橘の姓(ｶﾊﾞﾈ)は、宿禰(ｽｸﾈ)、のち朝臣(ｱｿﾝ)を賜る。739年、大宰府で起きた藤原広嗣(ﾋﾛﾂｸﾞ)の乱を鎮圧。749年、正一位。妻は藤原多比能(藤原不比等の娘)。757年、73歳薨去。

※ 聖武天皇の勅使として下向し、大和国金峯山の神を肥前波佐見に祀り金屋神社を創建したとさる(732)。

※ 万葉集に七首の和歌を残し、大伴家持(ｵｵﾄﾓﾉｲｴﾓﾁ)に万葉集を編集させたといわれている。

※ 日本史上生前に正一位になった極めて稀な一人。

↓

2代 橘奈良麿(ﾅﾗﾏﾛ) (721～757)

贈正一位太政大臣(公卿)、参議、左大臣、橘氏長者。諸兄.長男。藤原氏と対立し獄死(橘奈良麿の乱)。対立した藤原仲麻呂斬首後、名誉を回復し贈正一位・太政大臣。父は橘家、母は藤原家の血筋。孫の代に、第50代 桓武天皇の妃.橘御井子(ﾐｲｺ、橘入居(ｲﾘｲ)の娘)および妃.橘常子(ﾂﾈｺ、橘島田麿の娘)、第52代 嵯峨天皇の皇后.橘嘉智子(ｶﾁｺ、橘清友(ｷﾖﾄﾓ)の娘)、三筆の橘逸勢(ﾊﾔﾅﾘ、橘入居の子)等を輩出。聖武天皇の詔(ﾐｺﾄﾉﾘ)に応えたる奈良麿の歌一首、「奥山の、真木(ﾏｷ)の葉凌(ｼﾉ)ぎ、降る雪の、降りは益すとも、地に落ちめやも 」(万葉集第六巻1010番歌)。

※ 肥前長島荘(武雄)の言い伝えには、奈良麿は配流の末、奈良麿の乱で殺害された皇太子.道祖王(ﾌﾅﾄﾞｵｳ)の分霊を持って肥前に辿り着いたとある。杵島山の西の崎、橘町大字にある旧長崎街道の楢崎(ﾅﾗｻｷ)は、当時、奈良と呼ばれており奈良麿遺跡と皇太子.道祖王の墓碑がある。また、楢崎の正面にある潮見山には、後裔の橘公業(ｷﾝﾅﾘ)が築いた潮見城がありその山下には橘一族の氏神として潮見神社がある。公業は、その上宮に橘諸兄を、中宮に橘奈良麿を祭神として奉祀、のち橘公業も中宮に奉祀された。

↓

3代 橘島田麿(ｼﾏﾀﾞﾏﾛ) 平安時代

従四位下、兵部大輔、春宮亮(ﾄｳｸﾞｳﾉｽｹ)、橘氏長者、奈良麿.長男。768年、奈良春日神社造営の勅命を受け水神に祈願。以後水神を祀り天地元水神を橘家氏神とす。延暦十六年(797)、春宮亮(ﾄｳｸﾞｳﾉｽｹ)に任じらる。

※ 武雄市橘町の潮見神社参道入口第一の鳥居から県道330号線武雄塩田線を渡った処に「河童の誓文石」と「河童伝説発祥の地」の碑がある。当時、潮見川の河童が沿岸の人達に常々禍(わざわい)を及ぼしていた為、島田麿は此の誓文石のところに彼等を集め、懇々と戒め『若し此の石に花が咲く時が来たら皆の行動を認めるが、それまでは決して悪いことはしてはいけない』と言ってきかせたので河童達もこれを約束したと伝えられている。潮見神社は橘公業が興した潮見城のある潮見山の麓にある。

↓

4代 橘真材(ｻﾅｷ/ﾏｻﾓﾄ)

従五位上、伯耆守(ﾎｳｷﾉｶﾐ、鳥取)、島田磨.長男。

↓

5代 橘峯範(ﾐﾈﾉﾘ)

従五位上、若狭守、図書頭、神祇大副、中務少輔、橘氏長者。真材.長男。紀伝道に修学。承和十二年(845)、従五位下へ加階、承和十三年(846)、中務少輔、貞観二年(860)、図書頭、従五位上へ加階、神祇大副、若狭守に任じらる。貞観九年(867)、隠居。妻.民部大丞藤原末永の娘。

↓

6代 橘広相(ﾋﾛﾐ)/博覧(ﾊｸﾗﾝ) (837～890)

贈従三位(公卿)中納言、参議、左右大弁、橘氏長者。儒学者。峯範.次男。少年期、橘神童とも呼ばれる。文章博士.菅原是善(菅原道真の父)に学び、貞観九年(867)、民部少輔並びに文章博士に任じられ従五位下に加階さる。貞観十一年(869)、東宮学士に任じらる。仁和三年(887)、阿衡事件により失脚。陽成天皇、光孝天皇、宇多天皇の三代に仕うる。

↓

7代 橘公材(ｷﾐﾓﾄ)

従四位上、左京大夫、文章博士、左中弁、但馬守、近江守。広相.三男。母.左馬頭博風王女

↓

8代 橘好古(ﾖｼﾌﾙ) (893～972)

従三位(公卿)、大納言、右京大夫。公材.長男、漢詩人。第60代 醍醐天皇から、第61代 朱雀、第62代 村上、第63代 冷泉、第64代 円融の五代の天皇に仕える。天慶二年(939)、従五位上に加階、天慶三年(940)、右衛門権左に任じらる。天慶四年(941)、承平天慶の乱(ｼﾞｮｳﾍｲﾃﾝｷﾞｮｳ)の際、藤原純友追討の功労により大納言鎮守府将軍に叙仕され伊予国宇和郡を賜わる。(以降、橘氏は京にありながら瀬戸内海を往復し宇和郡の開発に勤めたため海運や海戦にすぐれた武士団として成長することになる) 天禄元年(970)、大宰権帥を兼帯し大宰府に赴任す。平安京へ帰還する前に病を得て972年大宰府にて80歳で薨去。

↓

9代 橘敏政(ﾄｼﾏｻ)

正五位下、橘氏長者、駿河守。好古三男。妻.花山院乳母右近。

※ 平安後期の貴族が隆盛を誇った藤原道長の時代

↓

10代 橘則光(ﾉﾘﾐﾂ) (965～)

従四位上、橘氏長者、土佐守、陸奥守(陸奥前司)。敏政.長男。妻.清少納言、後妻.光朝法師母。『金葉和歌集』と『続詞花和歌集』に1首づつが採録されている勅撰歌人でもあるが、和歌を好まず清少納言に歌を返さずもの別れとなっている。今昔物語の23巻15話 / 宇治拾遺物語 巻11-3 132話「則光、盗人を切る事」に、枕草子では、第78段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」、第80段「里にまかでたるに」、第128段「二月、官の司に」、江談抄(ｺｳﾀﾞﾝｼｮｳ)第三雑事に登場す。今昔物語によれば、三人の賊に襲われながらもかえって全員を切り伏せるなど、武勇にすぐれた無骨者であったという。子の季通も同左であった。貴族が武士に姿を変えていく片鱗を示している。

※ 宇治拾遺物語/今昔物語では、「今昔、陸奥前司雛壇光と倉入有けり。兵の家に非ねども、心極て太くて思量(ｵﾓﾝﾊﾞｶﾘ)賢く、身のカなどぞ極て強かりける。」 と評されてある 。

※ 枕草子は1000～1010年頃の作品。

↓

11代 橘季通/季道(ﾄｼﾐﾁ/ｽｴﾐﾁ)

従五位上、式部大丞、蔵人、中宮少進、駿河守(駿河前司)。則光.次男。『後拾遺和歌集』と『金葉和歌集』に三首入集している勅撰歌人。今昔物語では、父.則光の登場する23巻15話の次の16話「季通、事に逢はんとする事」(宇治拾遺物語 巻2-9 27話)に登場す。1060年頃没。

※ 今昔物語23巻16話「季通、事に逢はんとする事」は、季通が高貴な家の女房のところへ夜這いした際、その屋敷の家来から袋叩きにされるところを迎えに来た従者の小舎人童の機転で一命を取り留めた、という話である。前話(15話)の則光と同じく、季通も「此の季通思量賢く力などぞ極(ｲﾐｼﾞｸ)強かりけるに」と評されてある。

↓

12代 橘季綱(ｽｴﾂﾅ) (1020～)

従五位上、和泉守。

↓

13代 橘光綱(ﾐﾂﾂﾅ)

従五位上、河内守。

※ 貴族が繁栄した時代から武士の時代に移る

↓

14代 橘公光(ｷﾝﾐﾂ)

光綱三男。保安三年(1122)、橘家は鳥羽天皇にそれまでの勤労を認められ諱(ｲﾐﾅ)に「公」という字を賜り、代々実名に公の字を使用する家柄となる。兵範記(ﾍｲﾊﾝｷ)の久寿二年(1155)七月二十七日の日記に登場す。

↓

15代 橘右馬允公長(ｷﾝﾅｶﾞ）平安/鎌倉時代

平安後期の武将、弓の名手。官位.右馬允(ｳﾏﾉｼﾞｮｳ)。橘氏は京にあり平氏の家臣となり平氏方の武将として近畿各地で源平合戦に参加す。治承四年(1180)、平清盛が生存し未だ平氏一門が勢力を維持する中、平清盛四男で従二位権中納言.平知盛(ﾄﾓﾓﾘ)の家臣から源頼朝の麾下に入る。頼朝の祖父.源為義(ﾀﾒﾖｼ)に恩義があった為とされる。頼朝が鎌倉に入部した同年末のことで頼朝旗揚げの早い段階での鞍替えであった。一族をあげて長年住み慣れた京を離れ鎌倉に移り、先に平氏を離れ鎌倉に入っていた加々美長清(甲州.弓馬術礼法.小笠原流の祖、加賀美長清、小笠原長清とも)の仲介のもと頼朝の側近となる。頼朝から都や朝廷に対する儀礼を知る数少ない人材として重用され鎌倉に屋敷を与えられる(尚、橘氏は伊予国宇和郡が本貫地であった為、西国事情特に瀬戸内海沿岸の地理に詳しく、伊予灘から豊後水道海域で水軍(海賊)としても活躍しており、海戦に慣れない東国の坂東武士団にとって貴重な戦力と目された)。鎌倉に入った翌日の十二月二十日、鶴岡八幡宮の東、頼朝邸での椀飯(ｵｳﾊﾞﾝ、宴会)での御的始め(六名出場)に射手として子の公忠(ｷﾝﾀﾀﾞ)、公業(ｷﾝﾅﾘ)兄弟が射芸を披露す。源義経と共に源義仲(木曾義仲)討伐戦や平氏滅亡戦に加わり活躍。文治元年(1185)、壇ノ浦合戦後、義経の命により捕虜であった平清盛三男で清盛亡き後の平氏一門の棟梁.平宗盛(ﾑﾈﾓﾘ、平知盛の兄)の斬首を担当。平宗盛の処刑と平清盛五男.重衡(ｼｹﾞﾋﾗ、東大寺大仏の焼討で知られる)の最期について鎌倉の頼朝に報告す。奥州征伐後の建久元年(1190)11月、頼朝が上洛した際には京に馴るる輩として先陣を務める。平氏政権下で在京型の武士団となった橘

氏の殆どが平家と共に没落したが、公長一族は鎌倉の御家人となり没落を免れた。長男.公忠、二男.公業、次に公清、公仲、公久。吾妻鏡. 治承四年十二月、平家物語、明月記に記述あり。

↓

16 代 小鹿島橘氏流薩摩守始祖 橘公次左エ門尉公業(ｷﾝﾅﾘ) (1160 頃～1240)平安/鎌倉時代

平安後期から鎌倉初期にかけて活躍した武将、弓の名手。住み慣れた京都を離れ、鎌倉創業期より源頼朝の側近として活躍。およそ四十年間中世秋田の開発を推進し、肥前小鹿島(ｵｶﾞｼﾏ)橘氏の祖となる。官位.右馬允、長門国守護。公長.次男。薩摩十郎、左エ門尉薩摩守、下野守、小鹿島公業とも称さる。父.公長と共に源頼朝.直属の家臣となり、寿永三年(1184)二月、一の谷の戦いに参加。文治元年(元暦二年 1185)二月、源義経から先陣を任じられ四国打手の大将となり讃岐に上陸す。海戦を苦手とした坂東武士団にあって瀬戸内の海戦に慣れた橘水軍を率い平氏追討戦で功を尽くす。文治五年(1189)、奥州合戦(平泉.奥州藤原氏末裔.藤原泰衡(ﾔｽﾋﾗ)誅伐)の際には、中央道の頼朝本隊として従軍(二十八歳の頃)。奥州平定の軍功として頼朝より出羽国秋田郡(楊田、豊巻、小鹿島、伊森、桃河、吉田、滝川、砥公、大島の地)を賜り地頭に任じらる。鎌倉には戻らず平泉より直接、秋田郡男鹿半島(ｵｶﾞﾊﾝﾄｳ)に入部す(※ 小鹿島、男鹿島、ｵｶﾞｼﾏとも称す)。雄物川下流域に広がる秋田平野(現在の秋田市)の村々を支配下に置く。男鹿に入部した三ヶ月後の文治五年(1189)十二月、八郎潟東岸を拠点としていた奥州藤原氏の郎従.大河兼任(ｵｵｶﾜｶﾈﾄｳ)が七千の兵で挙兵。男鹿半島の付け根にあたる脇本付近で戦となり東から攻め入る兼任の包囲から逃れ一旦鎌倉に退去す。兼任は北進し津軽方面の鎌倉方を制圧し陸奥を南下し平泉に達す。兼任の兵力は一万に膨れ上がるが宮城栗原で鎌倉軍により蜂起は鎮圧された。公業は現地に代官や重臣を派遣し秋田郡の経営を再開、中世出羽国に新たな秩序を形成す。橘氏は元来瀬戸内海を往来し海運に従事した武士団であり、当然秋田に於いても水運を積極的に強化した。八郎潟舟運と雄物川舟運を日本海で繋ぎ、新城川・太平川・添川(旭川)などの舟運に従事し秋田平野の開発を推進す。八郎潟東岸には、琴丘町鯉川に巨大製鉄炉を建造し、井川町洲崎(湯河)には水堀で囲まれた 500 米程の武家屋敷の集落を建設す。また、秋田の神仏を大事にし男鹿の本山にしばしば田畑を寄進、秋田平野で生活する人民に定着していた太平山信仰を率先して崇敬す。公業自

身は橘氏の家督を嗣ぐものとして頼朝側近の立場にあり常日頃は鎌倉の屋敷に居住す。鎌倉での武士の生活は小笠懸や流鏑馬であり、毎年正月に行われる年始の弓始めには必ず射手として出場し腕前を披露。鎌倉での重要な行事には出席を義務付けられ、頼朝上洛の際には案内役を仕じらる。承久三年(1221)、承久の変に際して北条泰時(ﾔｽﾄｷ)に従い上洛し幕府方として活躍。同年、長門国守護に任じらる。嘉禎二年(1236)、幕府三代執権となった泰時の命にて、関東申次西園寺公経の所望する伊予国宇和郡を妥協し(吾妻鏡の嘉禎二年二月二十二日の条)、替地(ｶｴﾁ)として九州の肥前国杵島郡(現在.武雄市)、大隅国種ケ島、豊前国副田庄、肥後国球磨郡久米郷を賜る。四十年余りを所領としてきた秋田と三百年余りを支配してきた本領の伊予を放棄し、鎌倉より一族郎党を率いて肥前国杵島郡長島庄(肥前小鹿島、現在.武雄市)に入部す。嘉禎四年(1239)、秋田を子の公義に、その一部出羽国秋田郡内楊田(ﾔﾅｷﾞﾀ)を公義の弟.公員(ｷﾝｶｽﾞ余一とも)に分割譲渡す。鎌倉幕府により肥前国杵島郡長島庄 1000 町の地頭職(ｼﾞﾄｳｼｷ)に任じらる。嘉禎３年(1237)、潮見山に潮見城を築き居城とす。入城後まもなく退隠しこれを子の公義に継ぐ。頼朝より賜わる肥後国久米庄は公員に譲り、公員の子.公綱が地頭を相続。長島庄入部４年後の 1240 年 11 月５日死去。小笠懸や御的始めの射手として吾妻鏡に記述あり。通称を橘次(次男の意)、法名を公蓮。

※ 潮見城：潮見神社中宮から標識に従い登山。標高 151 米の潮見山に築かれた山城。最高所が三角点のところで、土塁(土で盛上げた攻撃地)、曲輪(館や社などがある平地)、堀切(斜面にある堀)、石垣などが今も見られる。

- 所在地：https://maps.app.goo.gl/igHs9t8o6chgNfmE8

※ 吾妻鏡の頼朝将軍記には、小鹿嶋橘左衛門尉公業、または橘次公成と記されている。

※ 橘氏(公業)は本拠.伊予国宇和郡を手放す際には甚だ難色を示しており、屋敷を鎌倉に構えながら北は秋田郡経営、西は瀬戸内海海運といづれにも力を入れていたことが察せられる。

※ 橘氏が秋田地頭であった時に植えたと言われるケヤキの巨木が秋田市柳田の火産霊神社境内にあり、「柳田のケヤキ」として秋田市の天然記念物に指定されている。

↓

17 代 小鹿島橘氏流薩摩守二代 薩摩守橘十郎公義(ｷﾝﾖｼ)

鎌倉初期に活躍した武将、弓の名手、公業十男。潮見城主。通称薩摩守、乙王丸とも名乗る。

嘉禎二年(1236)、父.公業が肥前に移った後も鎌倉の公業の残した橘家屋敷に残り時折幕府の行事に参加していたが、秋田郡の経営にも消極的であり延応元年(1239)を最後に秋田郡を放棄し、父の公業を追い鎌倉より肥前杵島郡長島庄へ入部す。公業より家督を継ぎ長島庄惣地頭となり、公業没後の寛元元年(1243)、鎌倉幕府により長島庄における惣領として承認さる。寛元五年(宝治元年 1247)、頼経将軍時の鎌倉在番中、弟.公員(ｷﾝｶｽﾞ)と共に宝治合戦(三浦氏の乱、三浦合戦とも)にて三浦泰村誅伐に参戦、五ツ石畳紋の旗をさし一番に筋替橋(ｽｼﾞｶｴﾊﾞｼ、筋違橋)北辺にて鳴鏑を三浦館に向け射放ち三浦館に攻め込み軍忠を励む。同戦にて弟.公員が三浦方の小河次郎ならび片切助五郎の放った大矢にて真甲(ﾏｯｺｳ、額中央)を射られ戦死す。荘園経営に於いては各所に配された庶子や庶家と共に族的結合を背景とした領主制を展開し、のち肥前国第二の荘園となる。現在.橘町を本拠とし土着化し、現在.北方町、朝日町、東川登町、西川登町など現在.武雄市全域及び南は嬉野塩田、西は波佐見までをその勢力下に置く。公業が始めた潮見川の治水工事を継承し河童伝説を創造す。領民に橘家氏神の水神を信仰させ六角川(潮見川)水域の利権を手中に収める。文永九年(1272)、子の代に四家に分かれ、長男.公村(ｷﾐﾑﾗ)は姓を渋江と改め、他の三家はそれぞれ牛島家(公茂)、中村家(公光)、中橋家(時業)を名乗り所領を分割す。

※ 吾妻鑑.寳治元年六月の三浦合戦の項では橘薩摩十郎公義と称されてある。また、弟の公員は橘薩摩余一公員と称されており、常に一番乗りを心がけていたため鎧兜を着けず狩装束のまま出撃し三浦泰村の家来により落命す、と記されてある。

※ 潮見城の山下、潮見神社下宮の参道では流鏑馬(ﾔﾌﾞｻﾒ)が行われていた。菊池家第五代当主.菊池経直は長島庄の荘官職として潮見大明神の祭礼に出席。笠懸(ｶｻｶﾞｹ)神事(流鏑馬)に射手として奉仕し落馬のため死去す。墓碑は潮見神社下宮の参道にあり。

- 所在地：https://maps.app.goo.gl/EXf5cPpV7vK2rwUx8

↓　中橋氏流

橘姓中橋氏流始祖 中橋六郎橘時成(ﾄｷｼｹﾞ)/時業(ﾄｷﾅﾘ)

橘姓 18 代。公義.四男。文永九年(1272)、分家し肥前国蘆原ノ邑(ﾑﾗ)(芦原、現在.武雄市北方町)に居住。中橋の氏は、父.公義から継承した地名による。杵島山の北部、現在.橘町から

北方町に至る上村地域(河上村、大崎村、大渡村)で、祖父.公業が長島庄に始めて入部した地。同族の渋江、牛島、中村のそれぞれの氏は、橘町の南方面(下村)にある村々の村名に由来す(渋江氏は志保江村)。下村方面は、凡そ均等の105町程度毎に渋江、牛島、中村の三家に分割さる。

※ 当時の杵島(ｷｼﾏ)はその名の通り島となっており、杵島の北部の芦原も有明海の潮が満ち引きする文字通り芦が生える潟であった。潮見川(六角川)は元々、現在の流れと違い潮見山の南端からそのまま東に流れ杵島山にぶつかっていた。そこで橘公業から子の公義、孫までの三代に渡り、潮見川の流れを変える大工事を行った。川の流れを潮見山の南端で堰き止め潮見山の山裾を縫うように北方方面に流れを変えた。潮見山の山裾から芦原まで船が通れる深い川を造設し河の流れを北の芦原方面に向けた。その水流は川堀として潮見城の防御となり、長島庄一帯に水を行き渡らせることとなる。その結果、長島庄は肥前第二の荘園にまで発展する。此の治水工事は領民を驚かせ、領内における橘一族の支配はなおさら盤石なものとなり、ここに潮見神社の河童伝説が誕生した。

※ 長男.渋江公村の子.公経は、大隅国種子島を公次に、豊前国副田庄を公多に譲与したため、渋江氏の領地は長島庄のみとなる。

↓

2代 中橋三郎公幸(ｷﾝﾕｷ)

橘姓19代。

↓

3代 中橋参河守入道公森(ｷﾝﾓﾘ) 南北朝時代

橘姓20代。子.公弘、公景。橘津山新左エ門公通を養子に迎うる。

↓

4代 中橋弾正忠左衛門公景(ｷﾝｶｹﾞ) 室町時代

橘姓21代。父.公森は遺言で、子.公景の采地である長島庄内久治布留村(現在.武雄市北方町芦原橋下付近)の内、富永名及び葦原の平倉里(ﾋﾗｸﾗｶﾞﾘ)の田地を公通に分譲するよう命じたため公景はそれに従うが、長島庄司.後藤資明の異議により永徳三年(1383)に停止さる。

↓

5代 中橋次郎左衛門公玄(ｷﾝｸﾛ)

橘姓22代。

↓

6代 中橋将監公成(ｷﾝﾅﾘ)

橘姓 23代。

※ 杵島山北部に橘中橋家所縁の月輪山・勇猛寺(ﾕｳﾐｮｳｼﾞ)あり。寺社境内の門前に建つ六地蔵の桿石の石柱には、橘中橋公覺法道之志 文龜三年五月吉日と記されてある。(文龜三年は、西暦 1505 年)

↓　掛橋氏・土橋氏流

7代 掛橋(土橋)六郎左衛門公貞(ｷﾝｻﾀﾞ)

橘姓 24代。公成.長男。掛橋の氏は、長島庄北部の地名(現在.北方町)。室町時代後期(戦国時代)、享禄五年、天文元年(1532)、周防国(ｽｵｳﾉｸﾆ)山口の戦国大名.大内義隆が、龍造寺氏と松浦氏を擁し肥前国に侵攻、佐嘉(佐賀)の領主であった少弐資元(ｼｮｳﾆｽｹﾓﾄ、武藤氏)を討伐す。長島庄の境界まで迫る大内氏の侵略を避け波佐見村長尾（波佐見町永尾郷）に移住。のち大村領主.大村家の家臣となり名字を「土橋」に改め、土橋六郎左衛門公貞と名乗る。

※ 橘一族、渋江氏、牛島氏、中村氏の戦国時代について

鎌倉時代より長島庄一帯を支配してきた橘一族も戦国の乱世に台頭した武雄塚崎.後藤氏や、小城.千葉氏、佐嘉(佐賀).龍造寺氏等の勢力に同化することとなる。本流の渋江氏は 13 代.公勢の時代に肥前西部を統一するまでに勢力を広げるが、永禄三年(1560)、15 代.公師(ｷﾐﾓﾛ)の時代に有馬氏(晴純)の攻撃により潮見城が陥落。波佐見に逃げ延びる。大村氏の家臣となり波佐見南部の岳ノ山城(岳山城)を預かる(永正四年(1507)、13 代.渋江公勢が、大村純伊の領地奪回を加勢し千八百の兵で有馬軍を打ち破った時の恩によるところ)。公師の弟.公重は潮見城の戦いで有馬氏により戦死し、公重の子.公成(公実)が肥後.菊池郡西迫間に居住し天地元水神社で家伝の勅許水神祭事を行い肥後渋江氏の祖となる。また、公師の四子のうち長男.16 代.公種が大村純忠(ｽﾐﾀﾀﾞ)の娘と婚姻し家禄四百石と大村姓を授かり、その子.作十郎公頼の代には家禄六百石となり代々大村藩の重職として栄える。また、公師の二男.公茂と三男.公延は、慶長十九年(1614)、大坂冬の陣に際して大阪方に加わるが、大阪城落城ののち肥前に帰郷し公茂が波佐見へ、公延が長崎へ身を寄せた。

※ 永禄三年(1560)、橘一族本流.渋江氏の公師と公重が有馬氏(晴純)に潮見城を奪われた戦いについて

渋江氏は百七十八名で潮見城の守備にあたる。此の時最新鋭の武器であった鉄砲を搬入している。(種子島は橘公業の所領でありのち四代子孫の渋江公次の所領とされている。1543 年種子島に鉄砲が伝来しており、公師は知人等のつてを頼り種子島から鉄砲を入手したとも推測される。または既に全国に伝播していたのか)。

さて、鉄砲を装備した城門に武雄堤子河の婦人が来て「吾は潮見大明神なり、此の城を守護すること数百年に及ぶ、然るに此の城を鉄砲を以て守るとは何事ぞ、急ぎ鉄砲を城外に出すべし、若し襲あらば神力を以て追い掃うべし」と告げられた。公師と父.14 代.公親は潮見明神の神託を無視することができず鉄砲は城外に持ち出された。此の神託は有馬氏の謀略であり、鉄砲を捨てたことを知るや有馬軍は潮見城に襲い掛かりその攻撃は鮮烈を極め公重他戦死者多く潮見城は落城した。

※ 渋江氏の分家は、先祖以来の水神の行法として波佐見南部.長野郷(協和郷)の水神宮.宮司の渋江氏(二男.公茂)、長崎蛍茶屋の水神神宮(長崎五社のひとつ)の渋江氏(三男.公延)。また、嬉野の渋江氏(四男.公記)、波佐見鬼木郷の渋江氏がある。渋江氏本家は、波佐見岳ノ山城の公師とその長男.公種の流れになる。公師から大村家に仕え、その子.公種は大村純忠の娘と婚姻し大村姓を賜り、その子.大村公頼は初代藩主.大村喜前の娘と婚姻、その子が一度藩主の座に推された大村公広(幼名虎松丸、虎之助)であり、大村藩家臣団で第二の家禄となる。

※ 佐嘉(佐賀)は、少弐氏と小城.千葉氏の勢力下であったが、龍造寺氏が周防国の大内氏と筑後.柳川の蒲池氏の支援を受け、1559 年に少弐氏を、1560 年に千葉氏を亡ぼし肥前国東部を統一す。

※ 当時、土橋の読みはツチハシであった。

↓　土橋氏・井石氏流

橘姓土橋氏流始祖 土橋甲斐守橘公房(ｷﾝﾌｻ) (1523～1591) 室町/戦国・安土桃山時代

橘姓 25 代。戦国時代に活躍した武将。井石城主。土橋氏始祖。子に、作左衛門前英(ｱｷﾌｻ)、勘助、弟に舎人(ﾄﾈﾘ)公祐(ｷﾐｽｹ)。天文十四年(1545)、大村領主.大村純前(ｽﾐｱｷ)の嫡男.又八郎が武雄.後藤純明(ｽﾐｱｷ)の養子.後藤貴明(ﾀｶｱｷﾗ、十一歳の頃)となる際、家臣団十七家と共に貴明に随伴し武雄に赴く(※ 18 代.武雄領主.後藤純明は、橘姓.渋江氏 13 代渋江公勢(ｷﾐﾅﾘ)と後藤家 17 代.後藤職明の娘の間に誕生した渋江家公勢の嫡男であったが、後藤職明に子がなかったため後藤家を継ぎ、後藤貴明を養子とした)。領地奪還を悲願し大村勢を再三攻め立てるが勝利には至らず、境界を接した松浦、龍造寺、有馬等とも幾年に渡り交戦す。貴明死後の天正 12 年(1584)、波佐見衆中、折敷瀬(波佐見北西部)衆中、内海(波佐見北部)衆中として、武雄と大村の双方に味方するという起請文を武雄領主.後藤家信(龍造寺孝信の実子で後藤貴明の養子)と大村領主.大村純忠宛に送る。書面に波佐見衆中の一領主として土橋甲斐守橘公房の名を署名す(土の字の右上に点あり ※波佐見町歴史文化交流館 https://goo.gl/maps/qpwgmgsbNoNx6Lzd6 にキリシタン起請文

として写しあり)。天正十三年(1585)、武雄から波佐見村.井石郷に帰郷(武雄から井石へ下向した際の逸話が井石神社に残る)。井石領主となり井石城を築き居城とす。大村領主.大村純忠から家禄53石余を下賜さる。天正十九年(1591)、68歳没。墓所は波佐見上村、宝暦五年(1755)に大村に改葬さる。法名.高照院永徳日昌居士。江戸期まで流鏑大権現とも呼ばれ、井石郷の鎮守氏神として明治三年(1870)井石神社に祀らる。家紋は抱き茗荷。母は田中氏の娘。

※ 井石神社の境内にある井石神社由緒には、『相伝へに曰く。公房武雄を立退き井石に落着し時今流嫡大権現境内の古松に夜々光物の有り土民不思議の思ひをなし之を見るに矢の根壱本松の枝に有り。実は家祖の矢の根にして代々神と崇め奉りし処武雄退去の時取り忘れたりという。且つ公房不思議な悪夢の告げ有るに依り此処に堂を造営し此の矢の根を安置し御神鉢となし奉る』とある。
- 所在地：長崎県東彼杵郡波佐見町井石郷2060 https://maps.app.goo.gl/zord3n61qDaMX19C7

※ 井石城は、井石の谷の東側、丁度井石神社の正面の鬼木から波状に延びる岡の上にある。山下には「城ノ前」の地名が残っており、山上には今も空堀や縦堀の跡が見られる。郷村記にも「東南の間の空堀の形あり長さ27間（49米）、横幅1間半（2.7米）ほど、堀より城の間およそ7間半（13.6米）」との記述あり。

※ 波佐見金屋郷には橘氏始祖橘諸兄を祀る金屋神社がある。聖武天皇の勅に依り橘諸兄公が勅使として下向し、大和国金峯山の神を此地に祀り金屋神社を創建したことに依る(732)。井石神社より南へ半里。土橋公房は井石城を此地に築城し橘姓を名乗った。

※ 土橋公房の弟.土橋舎人(ﾄﾈﾘ)公祐(ｷﾝｽｹ)/深澤家の祖：子孫：公祐の子.中尾土佐公清(ｷﾐｷﾖ)は波佐見.中尾郷に移る、その子が中尾次左衛門勝清(1583~1663)、のち深澤義太夫橘勝清を名のる(藩財政に献金、私財を投じ大村野岳湖を開発、社会事業への貢献により大村藩主大村純長より深澤姓を賜り大村藩家臣となる。寛文3年(1663)、80歳没)。寛文7年(1667)、その子.二代目.深澤義太夫勝幸(浅井角左衛門とも)の他三名と大村藩に願い出て長与村嬉里(ｳﾚﾘ)郷に皿山を開き長与焼を始める(代表的な長与三彩は1792年に市次郎が始め1820年に経営困難となり生産を停止)。のち深澤家は三家に分家し本家が義太夫を継承、大村城下に居住す。

※ 土橋公房の次男.勘助(甚兵衛)の子孫：父と共に後藤貴明の家臣となり永禄年間(1558~1570)に武雄に来て以来、勘助の子孫は武雄川良村(現在.大字富岡)に居住す。川良村は、鎌倉時代に橘家の所領であった長島庄の一部で室町時代以降、塚崎庄が興り後藤氏の塚崎城の城下となった地である。現在.新幹線武雄温泉駅の北東の地区で、武雄温泉駅を挟んで西側に武雄温泉街の大字武雄あり。今日でも土橋氏が多く居住す。江戸時代は佐賀藩武雄鍋島家に仕えていた。同家系は土橋をツチハシと読む。

↓

2代 圭橋(井石)作左衛門前英(ｱｷﾌｻ) (1572～1657) 戦国/江戸時代

橘姓26代。圭橋作助、作左衛門とも称する。号は如真。公房、四十九歳の子。妻は福田薩摩守忠兼(肥前国金屋郷領主、松山城主)の娘。城、石垣作りの名人。天正十三年(1585)、父.甲斐守公房に随従し武雄から波佐見村.井石郷に移住し井石城を築く。天正十九年(1591)、父.公房死去。翌.文禄元年(1592年)、20歳の時、豊臣秀吉の命により大村領主.大村喜前(ﾖｼｱｷ)に従い朝鮮に出兵(文禄の役)。一番隊として平壌まで攻め上がり四年間を朝鮮にて駐在。慶長二年(1597)、二度目の朝鮮出兵(慶長の役)では軍功により藩主.喜前から諱(ｲﾐﾅ)「前」を下賜され名を前英に改める。1598年帰陣の折、喜前軍は朝鮮人陶工を連れ帰り、郷里.波佐見村に定住させ陶器の生産を開始す。慶長三年(1598)、玖島城の築城と共に大村城下に武家屋敷街が建設され主な家臣が集住す。同時期に、波佐見村井石郷から大手門前の本小路へ移住したものと見られる。慶長十二年(1607)、藩が幕府より駿府城の手伝普請(公義役)を命じられた際、(居城の井石城が評価された為か)大村藩初代普請奉行に任じられ駿府へ赴く。慶長十九年(1614)、加藤清正から藩主へ玖島城を改修すべきとの提言があり、築城における当時としては最先端の技術を用いて大改修を行う。井石城と同じく巨大な乾(空)堀りを造設し、(信長・秀吉時代の城郭には天守閣が多く見られたが)本丸に天守のない館造りであり打ち込み接ぎと呼ばれる技法にて高く反り返る高石垣を構築す。元和三年(1617)、藩命によりキリシタン信仰を一掃し浄土真宗を広めるため、法頭.道閑(ﾄﾞｳｶﾝ)の領内巡廻に随従し、横瀬浦から外海一帯を経て、飛び地の戸町に入り、向地の浦上、滑石、時津、伊木力から、地方の鈴田、大村、川棚、波佐見と藩領全域を巡廻す。大坂の夏の陣後の元和六年(1620)、再び幕府より大阪城の手伝普請を命じられ大阪へ赴き大阪城石垣普請を勤める。大村藩は、西大手門外側石垣六間五尺六寸、京橋口御門左一番櫓下石垣四間、同門左櫓一番・二番の間の石垣四間二尺、同大手門堀外側の石垣五間一尺四寸三分、本丸下空堀十間の普請を担当す。石垣の高さは日本一を誇り秀吉時代に造られた石垣の二倍の高さとなる。(※ 大村藩は、二代藩主.純頼が急死しお世継ぎの純信が二歳であったため幕府に跡継の届け出を出せなかった。お家断絶の危機に瀕した故に、大村藩家老.大村彦右衛門純勝と松浦右近頼直は、六万石以上の大名に課される困難な公儀普請を引き受け、財政を工面し多くの人員を配してこれを早急に完成さす。大村藩の担当した大阪城の高石垣が予定より早く完成したため、江戸幕府重臣.土井利勝より家老.大村彦右衛門に感状到来、然るに幕府より三代藩主.純信の相続が許可さる)。大村藩初代藩主.喜前(ﾖｼｱｷ)、

二代.純頼(ｽﾐﾖﾘ)、三代.純信(ｽﾐﾉﾌﾞ)の三代に仕え、大村藩創業時の藩運営の基盤作りに忠勤。普請奉行の功により「公儀普請數度勉之役々加恩有而三百石」として家禄300石に加増。

土橋家(井石家)の家禄は、御一門払い後の大村藩家臣団中第五の家禄也。筆頭は、松浦右近頼直(大村右京亮とも、大村純忠の弟.盛の子息で、長崎甚左衛門純景の婿養子、のち時津村の一村一領主となる、大村姓を下賜された筆頭家老家で彦右衛門家とともに御両家と呼ばれる)の661石也。第二に、渋江作十郎(同族渋江家本家渋江公種の子息、大村姓を賜り拾右衛門を名乗りのち公頼となる)の600石也。第三に大村彦右衛門純勝(三代藩主.純信の相続問題を解決した滑石村の一村一領主、藩主分家で筆頭家老家の御両家)と福田枕流勝兵衛の400石也。知行地は、上波佐見村、浦上木場村(現在.長崎市三川町や川平町など昭和町の以北)等。明暦二年(1657)、85歳没。

※御一門払い(1607年)：庶家一門(藩主の親族)が藩内の知行高の上位を独占する状況で藩主権力の確立を阻害していた。二代目藩主.大村純頼は早くから父.喜前公と共に共同政治を行なっており、徳川家康の許しを得、財源確保と藩主権力強化のために一門の領地没収を断行。およそ三割六分程度の領地を大村家親族十三家から没収し蔵入地(大名直轄地)とした。御一門払いにより血縁関係に基づく家臣団は再編され、文禄・慶長の役や、宇土城攻防戦で功のあった家臣にも知行地は分配された。(関ケ原の戦いに於いて、大村藩は東軍に味方し加藤清正、有馬晴信と共に小西行長の宇土城を攻撃している)。

※二代目藩主.大村純頼の妻は、長崎甚左衛門純景(元.長崎領主.桜馬場城主)の孫娘。長崎甚左衛門は、大村純忠の弟.盛の子息.松浦右近頼直を養子にし頼直の娘が純頼に嫁す。長崎甚左衛門は、長崎の地を献上した見返りに初代藩主.喜前より時津700石を与えられたがこれを拒否し柳川領主に仕えた。長崎甚左衛門の養子.右近頼直が喜前に従い此の時津480石を受けとり頼直は時津の一村一領主となる(※ 一村一領主は他に、大村彦右衛門の滑石400石があり、両家を御両家と呼ぶ)。二代藩主.純頼と右近頼直の娘との間に三代藩主.純信が生まれるが純信は子に恵まれず、純信の妻方.幕閣伊丹氏より迎えた養子が四代藩主の大村純長となる。此の時点では大村氏の血筋が失われてしまうため大村氏との血縁の近さ故か、再度松浦右近頼直(大村純忠の甥、また妻方祖父も大村純忠)の娘が四代藩主.純長の妻となる。※ 大村領主/藩主: 大村純忠＞初代.大村喜前＞二代目.大村純頼＞三代目.大村純信＞四代目.大村純長。※ 長崎甚左衛門の妻は大村純忠の娘で、その間に生まれた娘の一人が松浦右近頼直に嫁し、もう一人の娘が井石作左衛門前英の嫡男.井石主水之允頼次に嫁す。

以降、井石前英(ｱｷﾌｻ)より、頼次(ﾖﾘﾂｸﾞ)、純成(ｽﾐﾅﾘ)の三代に渡り大村藩普請奉行を勤務。

↓

3代 井石主水之允頼次(ﾖﾘﾂｸﾞ) (1600～1656) 江戸時代

橘姓 27 代。公次とも称する。字(ｱｻﾞﾅ).主水の始祖。妻は長崎甚左衛門純景の娘(長崎甚左衛門純景の妻は大村純忠の娘)。二代藩主.大村純頼の諱「頼(ﾖﾘ)」を下賜され頼次と名乗る。普請奉行を勤務。寛永十四年(1637)、島原一揆(島原の乱)に際し長崎に駐在。一揆勢が幕府領長崎を襲撃するとの噂あり、幕府の命により二百五十名の番船五艘で長崎浦を固め長崎の警備を行う。長崎奉行の両人(馬場三郎左衛門、榊原飛騨守)が戦地原城へ出陣していた為、大村藩の使者として島原へ往来し松平伊豆守、および長崎奉行両人に長崎警備の指示を取り次ぐ。1656 年、56 歳没。

↓

4 代 井石文右衛門純成(ｽﾐﾅﾘ) (1626～1660)

橘姓 28 代。公重、純生、文右衛門とも称する。妻は浅田左門前安(朝長家本流)の娘。母は長崎甚左衛門純景の娘。普請奉行を勤務。藩主の諱「純」を下賜され、純成と名乗る。明暦二年(1656)、幕府領長崎へ異国船来航に際し警備に赴く。明暦四年(1658)、34 歳没。※ 母方の祖父は長崎甚左衛門純景、曾祖父は大村純忠。

↓

5 代 井石又左衛門長廣(ﾅｶﾞﾋﾛ) (1648～1701)

橘姓 29 代。公熙、左傳次、主水とも称する。妻は大村多門純房の娘、二の妻.田川次兵衛正形の娘。四代藩主.大村純長の諱「長」を下賜され長廣と名乗る。明暦四年(1658)、父.純成没故三百石之継。寛文五年(1665)、藩主.純長より知行三百石の内百五拾石を蔵米知行とされる。公の一字を賜り長廣と改め、長柄(ﾅｶﾞｴ)奉行や先手取次役などを歴勤。井石家は、波佐見から大村に移住してから六十年余りを大村城下町久原分.本小路(五小路の一つで玖島城の大手入口から伸びた本筋)に居住。のち寛文六年(1666)より大村市玖島の五小路の一つ、上小路(ｳﾜｺｳｼﾞ)に居住。此の上小路の屋敷は、元々母方.浅田家本家の屋敷であり、父.純成が急死した際、長廣がまだ 10 歳であったため母方の浅田家屋敷に屋敷替したものとみられる。表口の長さ 33 間 5 尺(約 61 米、面積約 4400 平米)の扇状に広がる大屋敷で敷地が現存。元禄十三年(1700)、53 歳没。

地図：https://goo.gl/maps/d1cDK2m92gwLGEDv9

↓

6 代 井石又左衛門信房(ﾉﾌﾞﾌｻ) (1668～1724 頃)

橘姓 30 代。寛文八年(1668)四月生誕。妻は山脇太郎左衛門長重の長女。元禄十三年(1700)、遺蹟(家督)を相続。侍鉄砲支配などを勤務。56 歳没。

↓

7 代 井石忠兵衛貴英(ﾀｶﾌｻ) (1693～1740)

橘姓 31 代。元禄六年(1693)に誕生。字(ｱｻﾞﾅ).忠兵衛の始祖。文右衛門、甚五平とも称する。妻は筒井刑部左衛門正明の養女、後妻.同人養女。取次役、脇備物頭、持槍奉行、郡奉行、用人、元締役を歴任。享保十七年(1732)、飢僅(享保の大飢儀)に際し、大村城(玖島城)備蓄の幕府御預米を大阪町奉行所与力と共に運搬・返納を行う。元文三年(1738)、上小路から外浦小路(ﾎｶｳﾗｺｳｼﾞ)に屋敷替。明治六年(1873)までの約百三十年余りを外浦小路に居住。外浦小路は、大村城下.五小路の一つで玖島城の南、藩庁(藩会所)と普請奉行所から南西におよそ 680 米伸びた上席家老や重臣諸氏十二家の屋敷街。幕末には、玖島城から順に、井石家の井石兵衛英章、次いで永代家老である御両家.大村家の大村邦三郎(家臣中最大の邸で表口の長さだけで 46 間 1 寸(約 83 米)、三代藩主.純信相続の危機を救った滑石村 400 石の大村彦右衛門系一族で格外家老職、当主.邦三郎は大村騒動にて切腹)、松浦家、長崎家の長崎文四郎、北条家(四代藩主.大村純長家来一族)、水谷家、大村家.大村太左衛門、浅田家.浅田弥次右衛門(名門.浅田家の分家で幕末期の佐幕派家老)、浅田家から南に深澤家.深澤司書、浅田家から北に隈家.隈外記包氏(建築家.隈研吾の先祖。福田家.式見.熊野系の流れを汲む家系で、幕末期の隈外記(ｹﾞｷ)は元城代家老。その嫡男.可也(ﾖｼﾔ)と央(ﾅｶﾊﾞ)兄弟は大村騒動の罪重により斬首とも。外記は縁座のため十五石に減俸となり知行地.式見にて蟄居)、最後に中村家の大屋敷が立ち並んでいた。当時、外浦小路の突き当りである隈家から中村家にかけては大村湾の海岸線に面していた。井石邸は玖島城から一戸目の「外浦小路」の碑が立つ場所(現在.大村市久原 1 丁目 1-11、外浦小路の碑から西におよそ 40 米、南におよそ 60 米の区分)にあった。皮肉にも 1867 年の大村騒動では、首謀と見られた大村邦三郎の屋敷は犯人捜索の遊撃隊を組織する兵衛宅の隣であった。大正時代、外浦小路の大部分に師範学校が建設されたため此の路は消滅す。のち同地に大村城南高校が創設され、井石邸の一部が同校記念庭園となる。今も大樹や石垣などが見られ当時の面影が残る。元文 5 年(1740)、47 歳没。

地図：https://maps.app.goo.gl/v4EnhQkp4pcw6sJX7

土橋家に伝わる史料について：

享保十九年(1734)、浦上村の知行に於いて、田畑の等級とどの程度の土地を何という小作人が耕作しているのかが「田畑坪成帳 浦上」に記されてある。「御検地帳写 浦上村」には、代官.宇都儀左衛門、黒板五郎右衛門の署名押印あり。「御検地帳写 大串村」には知行に於いて、田畑の等級とどの程度の土地を何という小作人が耕作していたのかが分かる。代官.河野貞右衛門、貞松左平次、郡奉行.土肥藤九朗の署名押印あり。(※ 史料が土橋晋助(冨蔵)からの後裔.土橋家に保管され現存す)

↓

8代 井石忠兵衛英清(ﾌｻｷﾖ) (1730～1794)

橘姓 32代。享保十五年(1730)十一月三日に生誕。忠兵衛、又太郎とも称する。母は貴英先妻。妻は岩永佐野右衛門前秩の娘。後妻.長崎源五衛門重大の娘。元文六年(1741)、家督相続後、藩主の能楽の相手役、家士武術頭取、近習加番、先手長柄奉行、侍鉄砲支配、旗本長柄奉行、四ケ浦押役(波佐見、彼件、川棚、宮の4村の統括官)を歴任。寛政六年(1794)、65歳没。

土橋家に伝わる史料について：

延享四年(1747)の「坪成帳写 買地 久原村」には、英清が購入した久原村の領地に関して、どれくらいの土地を誰が耕作しているかが記録されている。「田畑坪成帳 黒丸村」にも同じく記されてある。井石家の私領百姓(小作人)が黒丸に1戸、浦上に8戸、下岳に15戸等あり、合計40戸とある。(※ 史料が土橋晋助(冨蔵)からの後裔.土橋家に保管され現存す)

↓

9代 井石忠兵衛英淳(ﾌｻｱﾂ) (1755～1808)

橘姓 33代。宝暦五年(1755)八月四日に生誕。文右衛門、軍右衛門、源次郎とも称する。母は長崎重大の娘。妻は吉村藤助直方の娘。娘は城代家老.浅田大學織衛弘孝(浅田家本家)に嫁す。天明二年(1782)、家督相続後、武具方頭役などを勤務。唐津藩主.水野左近将監様(老中.水野忠邦)御通行廻番。大村藩主長崎御供、藩主の使者として七夕長崎御使者、八幡宮太刀役、春日社御太刀役を勤務(太刀役は刀の奉納の意)。大村藩火消年番仰付被。妻が藩主の若君様御誕生の乳母控となり、お七夜(誕生の六日目)のお祝いを頂戴する。平戸藩主.松浦壱岐守

御通行のお見送り。福岡藩主.黒田様御通行のお見送り。紅毛人(長崎出島オランダ商館員)江戸参府御通行に際し郡川支配役(警戒役人)。島原藩主.松平主殿巡視御通行の郡川支配役。幕府巡見上使大村藩到来につき火消方。前大村藩主江戸から大村藩帰国の際の廻番。島原大変につき大村藩領廻番、火消取締り。大風につき長崎御使者となる。大村藩盗賊方を勤務。紅毛人が将軍から拝領された御品の廻番。長崎奉行高尾伊賀守への大村藩御使者となる。松平筑前守様長崎御越の廻番。重陽の節句に際し長崎奉行への大村藩御使者となる。前藩主の長崎行に際し御供。水野様通行に際して大上戸川支配。次男.祥次郎(のちの英彦)が疱瘡(天然痘)となり領地の下岳村にて療養さす。領地の浦上村三組河内にて療養していた長男.英俊が病気により死去。文化三年(1803)九月から文化五年(1808)九月の期間、馬廻在番として福田大番所に在番。キリシタン禁制、密貿易禁止、諸国廻船の改めなど長崎港近辺の見廻りや取締りを勤務(※ 文化四年頃の史料が土橋晋助(冨蔵)からの後裔.土橋家に保管され現存す)。横目衆西光寺と共に三ヵ村役人が年頭挨拶に参上す。福田村、式見村、三重村、神浦村の大村藩の外海各地の番所役人が福田大番所へ出頭(福田大番所がこれら外海一帯の上部統括機関として機能していた)。例年の通り異国船が長崎港に入港する夏季の季節は浦々の警戒を入念に行うよう幕府の長崎奉行所から書状到来。大村城内の重役.大村直江からの廻状が到来。小豆島、播州(兵庫県)、薩摩、周防、肥後、天草などの廻船往来改めを行う。面高浦はこれまで崎戸大番所の支配であったが、これ以降は寄船大番所(横瀬浦)が面高支配を行うとの含みを甲野治部太夫より預かる。文化五年(1808)、54 歳没。

↓

10 代 井石左傳次英俊(ﾌｻﾄｼ)

橘姓 34 代。安永九年(1780)に生誕。英淳.長男。早世。病気役儀返上、隠居家督、家督御礼(英俊夭折のため、英淳次男で英俊の弟.英彦に家督を相続す)。浦上村三組河内に埋葬さる。

※ 井石家の知行地、浦上木場村三組河内について:

大村から長崎までの西山街道(殿様道)は、海路のあと伊木力から陸路で本河内を経て六枚板(現在.恵みの丘付近)など四箇所の馬を休める休憩所を通過して三組河内の兵底(現在.南山学院三川グランド)に到達、三ツ山の麓まで山を下り上の角(現在.三川町行きバスの終点)で水飲みの休息を取っていた。三組河内は、鎌倉時代(1200年頃)に創建された岩戸大権現を祀る神社が南山学院グランド東側から徒歩五分程の尾根付近に現存する古い部落で、江戸時代の安永期に腸チフスや赤痢等の疫病で亡くなった人々の墓が二十基ほど南山学院グランドの

西側山肌に見られる。この墓地は元々学院グラウンドの東と西に二ヵ所あったものを部落の者で西側一か所にまとめたものらしい。浦上木場村は井石家の知行地であり英俊もこの地で病を療養し病死後にこちらに葬られたと推測される。大村藩では病気が伝染しないように社会と隔絶されたまま埋葬される墓をその病名から疱瘡墓と呼んだ。同じ時代の墓石が多数並んでいたことからここは疱瘡墓とみられる。三組河内は長崎でも古い郷の一つで三ツ山の山裾に位置し平家の住む地であることから平底/兵底(ﾋｮｳｿｺ)と呼ばれていた。また、長崎港に入る帆船の目印となっていたことから三ツ山は帆場岳(ﾎﾊﾞﾀﾞｹ)と呼ばれた。

↓

11 代 井石作左衛門英彦(ﾌｻﾋｺ)(1787～1850 頃) 江戸時代

橘姓 35 代。天明七年(1787)に生誕。童名.祥次郎、兵馬のち主馬とも称する。英淳.次男、英俊の弟で英俊が病死した為家督相続。姉は浅田大学織衛弘孝(浅田家本家)に嫁す。妻は雄城左膳景の娘。享和二年(1802)、藩主の能楽の相手役を勤務。文化五年(1805)、家督を相続。以後、近習加番、江戸聞番見習となり出府し、のち江戸聞番格、随砲物頭、防護役、先手物頭(先手足軽鉄砲隊の長)、備方立合当役を歴任。※ 大村藩江戸上屋敷は江戸城西側の半蔵御門から半蔵門橋を渡った南側、現在.永田町国会図書館の西半分からテニスコートの区分(※ 国会図書館東側半分は肥後藩細川家上屋敷)、大村藩江戸中屋敷は新宿に、大村藩江戸下屋敷は藩主.純長期より白金邸と呼ばれ町人地や百姓地が混在する白金(現東京大学医学部医科学研究所 1 号館から附属病院 A 棟辺り)にあり。文政三年(1820)、帰郷し、用人、長崎聞役、五教館監察、宗門奉行(キリスト教の抑制)兼寺社奉行などを歴任。天保六年(1835)、唐人が長崎市中で放逸したため命を受け数十名を捕縛し大村の牢に預ける。天保十年(1839)、唐津の幕府領一挨に際し、境界警備のため上波佐見村に赴く。弘化元年(1844)、再び宗門奉行兼寺社奉行となる。弘化三年(1846)の藩主(第 11 代藩主.純顕)の能楽挙行に際し小鼓方不足のため老体ながら相手役を勤務。(藩主の能楽挙行では小鼓のお役目を井石家が歴代仕る。井石家が代々お役目を勤めたのは藩主の意向であったという。藩主.大村家と井石家(明治以降は橘家)の親交は平成時代まで続いていたという)。大村藩の新しい井手を建設する費用を支出した費用代として下岳村に新たな領地を賜る。

土橋家に伝わる史料について：

文政八年(1825)、「御検地帳写 新井手費代地 下岳村 田方」に於いて、その知行における田畑の等級とどの程度の土地を何という小作人が耕作しているのかが分かる。代官.中村恕平、

朝長新左衛門、郡奉行.松尾右八の署名押印あり。文政十二年(1829)、「五ヵ所物成納畑成池田分 久原 須田ノ木 大藤重太郎 仕事勤 渡海年兵衛屋舗下調 膝行神山関納 手頭」には、知行地五ヵ所(波佐見村、江串村、黒丸村、浦上村、大串村)でどれくらいの米、大豆、大麦などが取れ、どのような年貢として納めるか、神社寺院への寄付金や奉公人への給料をいくら支払ったかの記録がある。伊勢神宮への御初穂料、鯨油代なども記載されてある。文政十三年(1830)、「切田畑目検地帳 写 下岳村」に於いて、大村藩の請林として管理している下岳村の畑の等級とどのくらいの土地を何という小作人が耕作しているのかが分かる。代官.坂本孫兵衛、坂本角兵衛、此方役人.一瀬卯左衛門、江尻與五郎の署名あり。(※ 史料が土橋晋助(冨蔵)からの後裔.土橋家に保管され現存す)

※ 井石兵馬作左衛門英彦の子息(12 代)：

<u>長男</u>：兵衛英章/英成(下記に詳細を記す)

<u>二男</u>：勘治郎/高孝(山脇家.山脇五郎太夫高安の養子へ)

<u>三男</u>：雄三郎/逸蔵/のち包清(英基とも、福田氏宗家.熊野系.福田平八郎包隆の養子となり包清に改名)、家禄六十石。妻は包隆の二女。嘉永三年(1850)、包隆より家督を相続し岩船から小姓小路へ屋敷替。安政三年(1856)、大目付、同五年(1858)、用人を歴任。文久二年(1862)、持筒物頭(鉄砲隊長)を兼務し、元治元年(1864)、放免。

<u>四男</u>：土橋晋助(眞一、晋一、晋一郎、四郎治、公武とも、兄.兵衛の養子.土橋剛三郎となり、のち分家し土橋冨蔵となる)
文政八年(1825)生誕。弘化元年(1845)、江戸三大道場の一つ神道無念流.荘家.荘佳奈江頼治の養子、小姓となるも同年荘家から離縁。(荘家は大村藩の名家。のち家老.江頭官太夫顕頴の次男.新右衛門勇雄が荘家へ養子として入り家督を継ぐが大村騒動にて自決。新右衛門の実兄で藩の筆頭家老であった江頭隼之助は新右衛門自決のあと自主謹慎す)。同年、槍術稽古を命じられ出府。江戸、山本家(山本無辺流道場)に入塾し八年のちに印可相伝(免許皆伝)を授与さる(※ 免許皆伝の他、十文字などの兵法に関する巻物六巻が、晋助(冨蔵)後裔の土橋家に保管され現存す)。嘉永六年(1853)、帰藩後、無辺流槍術取立(役)となり、安政元年(1854)から八木(ﾊﾁﾎﾞｸ、米の意)五

俵ずつを拝戴し、安政二年(1855)、武術に優れた者からなる藩主親衛隊.二十騎馬副(ｹﾞｴ)の頭取となり、槍術取立(役)が大儀であるとして二口俸(一日十合の米)と時服を賜る。慶応二年(1866)八月、渡辺清を隊長として精選された精鋭十四名からなる新精組に選抜さる。新精組は、箕島(ﾐｼﾏ、現在.長崎空港)にて新型ミニエー銃、エンフィールド銃を用いた西洋式軍隊(英国式鉄砲隊)の合宿練習を行う。(※ 新精組は勤王派主導で組織された西洋銃陣隊。下関戦争(1864)における英仏蘭米列強の圧倒的な砲撃力を認め、大村藩は一早く西洋式銃を採用し軍制を西洋化した。のちの戊辰戦争では西洋式の精鋭部隊として各隊の先鋒を勤めることとなる。晋助.四十一歳の時)。翌慶応三年(1867)六月九日、渡辺清を隊長とした新精隊(十五名となり改称)として、土佐藩の後藤象二郎、坂本龍馬、土佐藩士、海援隊士等の乗る土佐藩船.夕顔に乗艦し長崎を出港、六月十二日に大阪に至り堂島の大村藩蔵屋敷に入る。六月二十日、兵器を分解し菰苞し幕府監視の目を掻い潜り伏見街道より入京、相国寺の薩州藩邸(現在.同志社大学)に入る。大村藩の兵数は補充され、相国寺西の今川道正庵には四十名余が屯所し薩摩藩兵と銃隊の練習を事とす。大阪藩邸には三十名余が屯所す。十二月九日、京にて王政復古の大号令出づ。大村藩兵は、薩摩兵と同じく御所.近衛家の後門を守備、即日轉(ﾃﾝ)じて建春門を守備す。翌慶応四年(1868)一月三日、鳥羽伏見の戦いが開戦し、同日、大村藩は、幕府領近江大津(米相場の中心、現在.滋賀県大津市)警護の勅命を受け急先鋒として出陣し大津を守備す。十三日、藩主と共に兄の井石兵衛(忠兵衛)が入京。大津にて藩兵が増員され藩主の感状が朗読さる。隊士一同感泣し死を以て事に當らんことを誓ふ。十七日、東征軍先鋒として桑名進撃に出陣、二十四日、桑名藩が軍門に下り大村藩隊は徳川の巨大要塞、桑名城を受領す。さらに大村藩隊は、改めて関東進撃の先鋒を命じられ名古屋から尾張、そして箱根の関所を奪い鎌倉へと進軍し、四月の江戸開城から関東各地を転戦し、五月の上野戦争では彰義隊を鎮圧す。六月七日、奥羽追討軍出撃の命を受け、六月十四日、薩摩藩兵、佐土原藩兵と共に東征軍平潟口(茨城県平潟町)の先鋒として品川を出港。六月十六日に常陸の平潟港に上陸。六月十七日、奥羽越列藩同盟軍が薩摩藩の陣を襲来。これを大村藩兵と佐土原藩兵が救援するがその際に手負う。のち藩主より「戊辰の役出張に於いて勇戦重創を蒙り報奨として目録金七十両」を賜る(重創とは重傷の意)。兄.井石兵衛の養子三男となり、のち分家す。(下記に詳細を記す)

<u>五男</u>：勝五郎/忠蔵公茂 (夭折)

六男：中橋六郎次公敏(河野家.河野多門通邦の養子へ)

↓

12代 井石兵衛英章(ﾌｻｱｷ)/英成(ﾌｻﾅﾘ)(文化十三年、1816～1889) 江戸/明治時代

橘姓36代。英彦.長男。忠兵衛、熊彦、甚吾平、公臣とも、晩年は、橘公臣と称す。妻は浅田千葉之助弘殷養方伯母.伊智子、またはイチ子。伊智子は血統上では浅田大学織衛弘孝の娘で弘孝長男の千葉之介弘殷の妹。(養方伯母とは浅田千葉之介弘殷(ｲﾝｺｳ)の養子先の伯母の意。浅田千葉之介の父.浅田大学織衛弘孝は酒井家から永二(浅田左門由衷となる)を養子に取り、のち千葉之介は左門由衷の養子に入った為系図上では左門由衷の長男となった。血統上の妹.伊智子は系図上では養子先の父.左門由衷の妹となるため左門由衷の子となった千葉之介から見て伊智子は養子先の叔母にあたることになる。※ 浅田千葉之介弘殷: 進五郎とも、のち俊光。城代家老.浅田大学本家。血統上の父は浅田大学織衛弘孝。弘孝の妻は井石兵衛の祖父.井石英淳の娘で父.英彦の姉、兵衛の伯母にあたる。浅田千葉之介の実弟.泰次郎は御両家.大村五郎兵衛(時津村.松浦右近頼直系)の養子となり大村泰次郎となる。慶応三年(1867)の大村騒動で千葉之介は兵衛とともに御両家の大村邦三郎と大村泰次郎に自決し自らを処置するよう諭す。泰次郎が弾劾されたため千葉之助も三十七士の盟主.針尾九左衛門に加盟を願い出て勤王の意を示す。浅田家の家禄は三十七士中最高の413石。明治維新後の藩主.大村純熙の東京移居に随伴、また千葉之介の子に同名の浅田千葉之介安尚)。兵衛は、小笠原流兵法(小笠原礼法、小笠原氏は、15代.橘公長を源頼朝に仲介した加賀美長清の末裔)を習い、藩主の武術相手役を務める(※ 切腹之法式など武士道の所作、礼儀作法に関する小笠原礼法六巻の巻物が、兵衛弟.晋助の後裔.土橋家に保管され現存す)。脇備長柄奉行、五教館監察、先手物頭(先手足軽鉄砲隊の長)、側用人などを歴任。知行地は、大村久原分150石、浦上村(浦上木場村、古場村とも、現在.昭和町以北の川平・三川地区)35石、下岳村14石、波佐見村8石、竹松村5石、大村池田分、黒丸村、江串村、外浦小路、(他に蔵米知行が150石)。弘化四年(1847)二月二十一日、大村純熙(ｽﾐﾋﾛ)が兄.純顕から家督を相続し12代.大村藩主となる。嘉永六年(1853) 、兵衛三十七歳の年、ロシア使節プチャーチンの来航に際し在番として長崎の警備を行う。安政三年(1856)、郷村記を編纂。同五年(1858)、持槍奉行。文久二年(1862)、兵衛四十六歳の年、(大村藩大阪蔵屋敷は、大阪堂島新地四丁目、現在.大阪市北区堂島３丁目川沿いにあり)。文久三年(1863)一月、大阪留守居役として京に召され傳奏坊城大納言俊克より勅諚を賜ふ。その報ありしを藩士に告示す。藩士.一瀬伴左衛門と濱田新助、勅諚の本書を守護し大村へ向け京を発す。「勅諚書頂戴に就き御請の為に藩主自ら上洛せしむ所以」を幕府の閣老水野和泉守の用人に此の様に報ぜしむ。其

書に曰く、「今度勅諚之為御請、上京之儀御請一通に候得者一先名代可差出哉と奉在候得共帝都近海非常之節御沙汰候は、早々上京可致旨勅諚之趣も御座候者若長崎近海同時騒動之期に至難任心底、何分相心得可中哉。右等之儀以名代申上候者恐入次第に付上京之上奉伺度奉存候。尤御指圓之上在所発足可仕處遠路往復日数相立候内攘夷御布告にも相成上京之御沙汰も候は両端に跨、御間缺之程難計候付急速相伺置申度、不得止事、本紙之通御届置に而発足仕候儀に御座候。此段各様迄申上候様丹後守申付越候以上。大村丹後守家来　井石兵衛」。二月、大阪蔵屋敷から上京し所司代.牧野備前守邸にて生麦事件に於ける幕府の対応を問う。備前守より英国への防戦の計を為さしめたりとの答を得て乃ち直に之を藩に報ず。三月、生麦事件の警報あり英国と海戦の已むを得ざるを察し長崎警護と領内沿岸警備急にして暫く藩主の上京は延引となる。九月、大阪より大村に帰藩し更に詳に上国の形勢を報ず。同年大阪聞番を免許。元治元年(1864)、佐賀藩三支藩の鹿島、小城、蓮池(ﾊｽﾉｲｹ)、及び福岡藩支藩の秋月藩へ大村藩の使者として赴く(大村藩は勤王を説き尚小藩である故に西国諸藩との同盟に向け帆走した)。五教館監察を兼務。慶応三年(1867)一月、兵衛五十歳時、大村騒動(小路騒動)に於いて藩士の暴発を抑え、手勢の足軽鉄砲隊のうち約五十名を城下の要所の警戒に当たらせ残りの約五十名を藩主の警護に当たらす。兵衛の他、渡辺清・昇兄弟、楠本平之丞(勘四郎のち正隆)と四人を以て藩士千名程を十隊に組織し日夜城市を巡廻なさしめ奸人の捜索に従事す(同隊は遊撃隊と呼ばれ再編され大村藩十三隊となる。十一月にはその上に、兵衛の他、渡辺昇、楠本平之丞、長岡治三郎、長岡進次郎の督議五名が置かる)。二月二十二日、遊撃隊により犯人は逮捕され、兵衛の他、稲田東馬、一瀬伴左衛門、土屋善右衛門、渡辺清・昇兄弟、楠本平之丞、長岡治三郎ら十名に犯人への詰問が命じらる。また御両家の大村邦三郎が賊徒に関わっていたことが明らかとなり、浅田千葉之介とともに隣家の大村邦三郎を訪問し大義を説き士道に従い自らを処するよう諭す。邦三郎は大いに後悔し自決の意を表す(兵衛邸は外浦小路の一戸目、邦三郎邸は二戸目)。同年暮れの十二月二十八日、大村藩主.純熙(ｽﾐﾋﾛ)および大村藩隊が上洛の途に就く際、側用人として藩主に随従。大村から薩摩藩.豊瑞丸と曳航される富有丸に乗艦し京へ向け出航。冬季の玄界灘は航行が危険である為、藩主と側近、籠を担ぐ足軽六名等と川棚から陸路に進路を変え海岸線を辿り下関の南端.彦島の副浦へ向う。途中、筑前福岡藩の黒崎番所にて、江戸薩摩藩邸焼き討ち事件と、幕府と薩摩が開戦必

至であるとの報を受け途を急ぐ。翌慶応四年(1868)一月五日、彦島より乗船し海路にて九日に兵庫港着。(※ 同時期の京都。一月三日、鳥羽伏見にて薩摩と幕府の戦が勃発。同日、西郷隆盛は大津出兵の命をいくつかの藩に発したが、大村藩のみ出兵に応ず。同日大村藩は大津宿に下りここを固めた。その為近江口から京都に侵入しようとした幕府陸軍砲兵隊は入京を阻止さる。翌四日、彦根、阿波、佐土原、備前の軍も大津に加わる。五日には更に越前小浜藩の軍勢300名余が大津を通過し京に入ろうとするも大津守備軍の前に小浜藩軍は進行を諦め国元に引き返した。大村藩隊の活動が鳥羽伏見での新政府軍の勝利に繋がる一因となった)。一月十三日、藩主と共に入京し、一月十五日、藩主が参内し天皇に拝謁、感状を賜る。大津からの使者に会し大村藩軍を激励。一月二十六日、澤宣嘉(ﾉﾌﾞﾖｼ)卿が九州鎮撫総督兼長崎裁判所(元長崎奉行所)総督に任じられ、藩主は長崎裁判所副総督に任じられ澤卿の補佐を命じらる。二月六日、澤卿と大村藩主に随伴し佐賀藩甲子丸にて大阪を出港、二月十四日、長崎帰着。四月、江戸城開城、五月、上野戦争勝利の報ありき。六月、東北にて東征軍苦戦の報を受け、大村出羽口大村藩北伐軍参謀に任じらる。奥羽越列藩同盟を脱退し孤立した出羽秋田(佐竹氏.久保田藩、新田藩)、および新庄藩の救援軍(大村藩三番隊または北伐軍)を組織。大村藩兵を率い伊木力を経て長崎の大村藩蔵屋敷に寄宿。長崎鎮撫総督府総督の澤宣嘉に謁見し、八月六日、怱忙のうち英国汽船ヒューロン号で秋田に向け長崎港を出立。日本海を西廻り航路にて北上し、八月十一日、羽州久保田藩領男鹿(ｵｶﾞ)の舟川港に上陸(同地.男鹿半島の船川は橘氏十六代.公業が鎌倉より入部した秋田郡の本拠)、八月十三日、総監.大村右衛門(同族.橘姓渋江家本家/小鹿島氏系大村氏、次男.果は渡辺清の娘.筆子の夫、筆子は津田塾に合併された静修女学校の校長)と共に奥羽鎮撫総督府総督の九条道孝に謁見し進撃の命を受ける。八月十五日に刈和野、八月十六日に角館(ｶｸﾉﾀﾞﾃ、秋田県仙北市)に進軍し出羽庄内藩の攻撃を前線で防御し角館を戦火から守る。八月二十二日、総督府直属の官職.軍監兼使役に任じられ進軍の準備を為す。(※ 戊辰戦争に於いては、藩主や藩庁組織に軍事指揮権はなく、朝廷から命じられた各藩軍の集合体である官軍すなわち新政府軍の総督府にその実権は集中した。奥羽鎮撫総督府は、会津藩討伐と東北の鎮圧を目的に設置された最高機関で、各藩隊への指揮系統を潤滑にするため総督府直属に軍監、参謀、使役が置かれた。軍監は作戦を下知し軍を動かし、使役は戦場を巡見するという役目で、兵衛はその両職を兼帯した。総督府では、敵地の見察・臨時の賞罰・職場巡見・敵動静の報告等の任務を命じられている)。戦勝が明らかになった九月二十日、総督府より「褒賞金二十両フランケ

(毛布)被下候、猶勉励奮戦可遂成功候事」の感状を賜る。九月二十三日、最上の先鋒として庄内領に進軍との命を受け、九月二十四日、矢島口(日本海沿岸の秋田と山形の境、由利本荘)にあった兵衛軍進発す。内陸に進路をとり九月二十五日に湯澤着。九月二十六日、奥羽を南下し新庄領に入り風雪の中を行軍、九月二十七日、新庄を経て神田に宿陣す。九月二十八日、進路変更の命に依り蔵岡驛に達するも砲隊は悪路を進み間柄驛に宿陣す。九月二十九日も暴風雨を経て蔵岡を発し最上川を下り清川に赴く。此の日、船舶が不足し前進できなかったが松山藩降伏の報を得、以て松山進軍の命は解かれ更に庄内へ進発す。十月二、三両日を以て庄内.鶴岡城下に陣す。十月は我が地方の十二月にも比すべしと云う程の大風雪の中、衣類顔手足共泥付候事のみ。十月六日、総督府は軍事会議所を解散し、大村藩大村右衛門隊その他各藩兵凱旋の途に上がる。獨り軍監.兵衛のみは尚海岸道進撃軍を監して未だ帰隊するに至らず。兵衛は軍監として矢島藩を巡察しその勤王貳心(ｳﾗｷﾞﾙｺｺﾛ)無きを確む時に和歌一首を詠み色紙に書して該藩に贈りしことありしにのち明治二十六年七月八日、史談会席上に於いて生駒家(旗本/明治以降出羽矢島藩の藩主となる)の取調員之を語り其の色紙を提出す。和歌に曰く、「もゆる色にあかき心もあらはれて　紅葉しにけり秋のやまゝ」(勤王のための戦に燃える己の赤い心(赤心＝偽らざる誠の心)が洗われるかのように秋の山々が赤く染まっている、自身の赤心と秋の山々の紅葉を掛けて勤王の志を暗に示した歌と詠める)。十月十九日、山形を発し二十三日に福島に入る。羽州軍の凱旋命令に遅るること九日なりき。十二月一日、島原藩、武雄藩の兵と共に品川を出航、十二月七日に長崎に港着し藩邸に宿営、翌八日、伊木力から海路大村に凱旋す。藩主より「王之志厚く戊辰之役北伐兵を副督し羽州に進み軍務勉励續て(ﾂﾂﾞｲﾃ)総督府軍監の命を奉し功労不少仍て(ﾖｯﾃ)現米六石終身賞與候事」として功労の積年金を賜る。明治政府より「昨年賊徒掃攘之砌軍事蓋力之段太儀被思食仍爲其慰労其賞五十石下賜候事」として賞典禄五十石を賜る。明治時代になると苗字に橘氏を名乗り実名を公臣にあらためる。長男.公穀(東京鎮台付陸軍大尉のち東京府判任官)と、四男.彪四郎(駒場農学校予科)、弟で養子三男.冨蔵(剛三郎)から預かる冨蔵長男.虎蔵と共に東京に居住。戦後処理等のため新政府に召し抱えられたものと思われる。明治政府より戦功賞典金二百両を賜る(明治宝鑑)。明治十年(1877)、長男.公穀が福岡県へ転勤し、四男.彪四郎を東京大学予備門の寄宿舎に入舎さす。明治十六年(1883)、福岡師範学校校長であった長男.公穀

が死去。明治十八年(1885)、医学修学中の虎蔵を脚気衝心の病で喪失。明治二十二年(1889)、73 歳没。墓所.東京上野谷中墓地。華族制度資料集: 昭和新修華族家系大成別巻四五頁に井石忠兵衛記載さる。※ 妻. 浅田家宗家.伊智子、イチ子、明治三十一年(1898)、没。(戦後、橘家主人.信作とお嬢さんが来崎し清英と面談、兵衛の妻.伊智子の遺骨を長崎に置いていかれる。長崎市坂本墓地土橋家墓地内橘家の墓に分骨す)。

※ 大村騒動(小路騒動)について

大村騒動は、反対者を追放や処刑などにより排除し藩論を勤王に統一した粛清劇。幕末の西国諸藩では、勤王と佐幕で藩論が対立していた。大村藩ではさらに、既存の北辰一刀流派と新しく藩で採用された神道無念流派、刀や槍を用いた旧式軍制と銃や砲を用いた西洋式軍制、御両家や家老家(既存の権威)とそれ以外の士分、といった主義や士分による対立要素や私恨といったものが複雑に絡み合っていた。これにより大きな括りで言うところの勤王派(改革派)と佐幕派(保守派/反改革派)とに藩閥が割れることとなった(武力討幕論と話し合い倒幕論という見方もあり)。勤王派の首領であった渡辺昇は、藩主.大村純熙(ｽﾐﾋﾛ)を擁し、佐幕派の首領.浅田弥次右衛門を政治の中心から排除し、最後は佐幕派の盟主と見られた(神輿に担がされた可能性もあり)御両家の大村邦三郎と大村泰次郎を切腹に追い込み、三十名程を斬首または獄死に、縁座では百名余りを配流・蟄居・知行の没収に処した。大村騒動は、渡辺昇.清兄弟、楠本正隆、長岡治三郎をその中心とした二十代青年等による封建的旧体制に対する革命的且つテロリズム的側面があったとも云える。勤王ファシズムの先駆であったとも云える。

※ 井石/土橋家と戊辰戦争

戊辰戦争に於いて大村藩は一番隊から三番隊まで三度に渡り部隊を派遣す。大村藩は早い段階で勤王討幕に藩論を統一し、六月の時点で藩の精鋭部隊である新精隊十五名を京都に送り込んでいる。新精隊には井石兵衛弟.土橋晋助のちの土橋冨蔵が選抜されている。一番隊は、大村藩東征軍と呼称され新精隊を中心として組織され開戦当初五十名ほどだったのがのちに隊員数は増加された。一番隊は、新政府軍の東海道征討軍五万人の先鋒として江戸へ向け進軍す。上野戦争からの検閲では、総督. 土屋善右衛門、軍監. 長岡治三郎、小隊長に兵衛長男.井石兵馬/公毅、半隊長. 山岡平九郎、分隊長. 兵衛次男.北条新三郎(土橋斎二郎公平)を指揮官とし、新精隊隊士.土橋晋助等を含む総員百二十五名で構成さる。二番隊は、東北での官軍の苦戦を受け編成された応援隊百十一名で(同族の井石延平が書記として従軍)、小名浜港(福島県いわき市)から上陸し三春方面で交戦中の一番隊に合流している。その際に評議を行い、先発の東征軍を一番隊と称し、応援隊を二番隊と称することに決めている。三番隊は、関東、会津方面に出軍した東征軍とは区別し北伐軍(または吾往隊)と称する。総督を同族の大村(小鹿島)右衛門、用人を十九(ﾂﾂﾞ)貞衛、参謀を井

石忠兵衛(兵衛)として、日本海を北上し秋田方面に派遣された総員三百二十六名である(島原藩と平戸藩との合同軍で兵力を合計すると約千名となった)。のち兵衛は総督府直属の軍監兼使役に任命されている。井石/土橋家からは、東征軍の初陣から指揮官を含む合計四名を派遣し忠勤を尽くした。明治二年(1869)、大村藩の明治維新賞典禄(ｼｮｳﾃﾝﾛｸ)は、薩摩、長州の各十万石、土佐の四万石に次ぐ第四位の三万石であった。授禄者,大村藩主.大村純熙(ｽﾐﾋﾛ)。

※ 刈和野の戦いで戦死した大村藩北伐軍少年兵.浜田謹吾の墓が秋田県仙北市 角館神明社 宇津巻天神(菅原神社)境内にあり。

※ 井石兵衛英成/英章 (橘公臣)の子息(13 代)：

<u>長男</u>：井石兵馬、星太郎、大五郎とも。通称土橋公毅(ｷﾝﾀｹ)、公穀(ｷﾝﾀｹ)、公武、のち橘公毅/公穀。(1838 年頃に生誕)。嘉永三年(1850)、藩主.大村純熙.幼君の学問相手役を務め、藩校.五教館で学問に励む。藩命により肥後熊本藩の儒学者.木下韡村(ｲｿﾝ/木下犀潭ｻｲﾀﾝとも)に修学(※ 木下塾門下生に横井小楠など)。幕末の動乱に際し異変方として浦上と長崎の警備に赴く。元治元年(1864)、五教館斎長となる。戊辰戦争(1868)では半隊長のち小隊長として大村藩東征軍を指揮し、江戸城明け渡し、上野戦争、会津戦争等で活躍。慶応四年(1868)一月十八日、先鋒として大津より桑名征討に出発、一月二十二日、四日市に滞陣し、久松源五郎、松尾六蔵と共に富田、松寺、山田に出張し同地名主.伊東十次郎に面して兵糧手當(ﾃｱﾃ)の承諾を得る。大村藩は本田忠勝が築いた巨大城郭の桑名城を受領し、東征軍本隊として薩摩、長州、佐土原の三藩兵と共に進軍す。二月十二日、桑名を発し、名古屋、尾張、二十一日には浜松に宿陣、同日江戸より馬廻.土屋善右衛門以下十三人が隊に加わる。静岡、沼津に進み、二十八日、箱根の関を占領、小田原、平塚、藤澤へ進軍し、三月六日に鎌倉に入り建長寺に陣す。三月十日、来る十五日を以て江戸城進撃の命が達せらる。三月十二日、神奈川宿陣、三月十三日、川崎宿陣、三月十四日、品川宿陣。是の夕刻、勝安房(海舟)、西郷吉之助(隆盛)と薩陣に会し江戸無血開城が決す。大村藩士.渡辺清がその席に列す。四月、江戸城開渡しに就き西丸門の警備を厳ならしめ不慮に備ふ。関東各地を転戦。五月十五日、上野の戦いでは、大村藩左隊を率いて加賀藩前田家屋敷(加賀藩邸、現在.本郷.東京大学赤門付近)を出発し根津に進み根津総門口(根津神社入口)で長州藩別隊、岡山藩(備前藩)砲隊と共に彰義隊の一隊を殲滅す。そこへ大村藩右隊が苦戦(右隊を指揮する宮原俊一郎(新精隊隊士で大

村藩一番隊の小隊長、のちの小佐々俊一郎)が千駄木から団子坂に出た際に伏兵の銃撃により重傷を負い応援を要請す)の報を受け岡山藩砲隊と共に団子坂へ向い右隊と合流。大村藩兵を一つにし長州藩兵と共に戦闘におよび岡山藩兵の後援を得て彰義隊を団子坂から谷中の山門に後退さす。午後、薩摩藩.篠原隊が南側より突入し上野の黒門を突破、諸藩兵もこれに続き敵陣を北へ押し返し山門まで後退さす。大村藩隊は長州藩隊と共に谷中の入口に急行し彰義隊を待ち受けたが戦闘にならず彰義隊残兵は囲みを突破し東北方面へ潰走、新政府軍は彰義隊を一日で撃退した。以降、小隊長として大村藩東征軍を指揮す。新政府軍の先鋒を任されることもあり、会津戦争まで旧幕府軍の追討を行う。九月二十四日、会津処分が完了。十月七日、大村藩は福島に着陣。十月十四日、東京へ向け凱旋。十月二十八日、東京に帰着。十一月三日、東京を発し東海道を経て十一月二十八日に大村に帰還す。藩主より「戊辰之役東海道に進み一隊を指揮し續て奥州に出張各所奮戦勵精其任を蓋し功労不少仍て現米六石終身賞與候事」を軍功として賜る。明治四年(1871)、大村藩の兵制改革により少尉心得に任じらる(大尉心得 十九貞衛、中尉心得 和田勇馬)。「御沙汰書 陸軍始総指揮官被 仰付 陸軍少将 東伏見嘉彰 達書 一等給下賜 陸軍大尉 井石公穀」の旨、陸軍大尉に任じられ東京鎮台に勤務。明治七年(1874)八月八日、佐賀の乱鎮圧の功により正七位に叙さる。(西南の役勃発前夜の)明治九年(1876)十二月七日、非役陸軍大尉(非役とは、奏任官で陸軍大尉の身分であるが、陸軍省内で役職に就いておらず職務がないこと。下野した西郷隆盛や桐野利秋等のような政治的意図があったのかもしれない)であった公穀を、東京府権知事.楠本正隆(旧大村藩士)が東京府職員に採用したい旨陸軍省へ照会す。差し支えない旨の回答であった為楠本正隆によりそれを許可して欲しい旨太政大臣.三條實美(三条実美)に文書で伺う。翌十二月八日、太政大臣の三條實美が楠本正隆の此の伺い文書を受け付けそれを許可す。それを受け十二月十三日、楠本正隆が奏任官で非役陸軍大尉正七位の公穀を判任官で東京府の権大属として採用したと太政大臣の三條實美に文書で報告す。明治十年(1877)二月二十二日、薩摩軍による熊本城砲撃から西南の役が始まる。三月十日、福岡県三等属に任じられ東京より福岡県へ転勤、弟.彪四郎(父は兵衛、のち公穀の養子となり橘家の相続人となる)を東京大学予備門の寄宿舎に入舎さす。戊辰戦争時、公穀の上官であった渡辺清が佐賀の乱の直後より福岡県県令を勤めていた(1874~1881)。同年、十二月、教員伝習所が師範学校となり修猷館内に設置された福岡師範学校の初代校長に任じらる。明治十二年(1879)、福岡師範学校の規則を改正し県下の師

範学校を福岡に一本化す(1943年より第一師範学校となる)。明治十六年(1883)、45歳前後で没。正七位。墓所.東京上野谷中墓地。※ 妻.さ多。

※ 井石兵馬公毅 (橘公毅)の子息 (兵衛英成の孫)(14代)：

長男.早死しその子.確三はのち兵衛の四男で公毅の養子.彪四郎の養子となる。二男.新生はニコライ神学校卒、二十数年在米し帰国後.末妹熊野雄七夫妻を頼る、新生の長男.公嗣は宝塚居住、新生の娘チエは米国に渡米しイリノイ州に居住、その二世の四郎(新生の孫)は土壌学研究の科学者。長女.くには東京陸軍高級武官松田夫人也。三男.彪四郎(下記参照)。末妹は明治学院大学創設者の一人大村藩士.福田家.福田忠次郎のちの熊野雄七に嫁す、その一女.かをるは養子を迎え二女あり、かおるは新生の娘で米国在住のチエと文通し戦後土橋清英(下記参照)に公毅子孫の近況を手紙で伝うる。四男.虎生は尼崎居住。五男.安生は赤穂海水株式会社家に養子となり1961年時赤穂在住。

二男：井石公平、通称 土橋斎二郎公干、土橋才次郎とも、のち北条新三郎。幕末の志士。五教館で修学し、五教館職員として表詰を勤務。西彼杵七ツ釜村中浦知行の北条珪之丞蕃の養子.北条新三郎となる。慶応二年(1866年)八月一日、渡辺昇に随従し藝州(広島)から馬関(下関)に向う。馬関に至る帰路、兵士七八人から幕府の間諜と目され危うく斬られんものとす。その長が渡辺昇の剣術の弟子.太田市之進(のちの御堀耕助。維新後、従兄弟である乃木希典を黒田清隆に紹介し乃木は陸軍で栄達)の父.太田要蔵であり市之進も船に来たり兵士の無礼を謝す。臺山公事蹟には、新三郎は藝州から渡辺昇に随伴したと記されている。(渡辺昇は、伊藤博文(俊輔)とともに長崎を発し、平戸、馬関(下関)、周防(ｽｵｳ)小郡、三田尻、長州(山口)、藝州に至り長州藩に我が藩も列藩合縦して王事に奔走する国是の在る所を説いている)。三田尻に於いては、薩人.黒田清隆、村田新八に会す(のち村田新八は伊藤博文と共に馬関を発し長崎を経由し艦船を受け取りに上海へ向う)。長州から防府(ﾎｳﾌ)富海までを桂小五郎が随行し馬関に於いて豪商.白石正一郎邸にて挙兵中の高杉晋作に会し、八月中旬大村に帰藩す。戊辰戦争に於いては、初戦の大津に急先鋒として出陣し、大村藩一番隊.嚮導(ｷｮｳﾄﾞｳ)のち分隊長となる。大村藩軍を率いる兄.兵馬(公毅)を補佐し東北まで歴戦。「戊辰之役東海道出張續て奥州に進み軍務勉励其功労不少仍て目録之通賞與候事金六十両宛」を藩主より賜る。※ 大村家は三代藩主.純信の代で断絶の危機となり、譜代大名.伊丹勝長の四男が大村家の養子となり大村藩四代藩主.大村純長となる。北条家は、純長の家来として大村藩に入った重臣一族。

※ 土橋斎二郎 (北条新三郎)の子息(兵衛英成の孫)(14 代)：

長女.福子(未婚)、長男.信(漢字不明)三、その妻.針尾の児玉家(大村藩家老針尾家)の娘、その長女は島原へ、二女.は針尾の松永家に嫁し、三女.まり子は長崎居住。

三男：通称 土橋晋助/晋一、作左衛門英彦.四男、のち兄.兵衛の養子.三男.土橋剛三郎となる。のち冨蔵に改め明治六年(1873)に分家す(下記に詳細を記す)

四男：通称 土橋豹四郎(ﾋｮｳｼﾛｳ) (文久二年、1862～1916)、兵衛.四男、のち兄.公穀の養子三男.橘彪四郎(ﾋｮｳｼﾛｳ) となり家督を相続。明治四年(1871)、旧大村藩立五教館にて漢字、習字、数学を修業。明治七年(1874)、東京私立九段学舎にて英学、漢学、数学を修行し、明治政府が設立した官立洋(英語)学校の開成学校に入学、明治十年(1877)、日本最初の官立大学.東京大学の発足に際し、官立洋学校が東京大学予備門となり編入し生徒寄宿舎に入舎(初年度八十六名)。明治十四年(1881)九月、駒場農学校予科に入学。明治十六年(1883)、後見人であった兄.公毅(養父)が死去。明治十九年(1886)七月、駒場農学校農学科(東京大学農学部前身)卒業。明治二十年(1887)、神奈川県尋常師範学校教諭、明治二十一年(1888)、栃木県尋常師範学校教諭、明治二十二年(1889)、千葉県尋常師範学校教諭。明治二十二年(1889)、父.兵衛または橘公臣が 73 歳で死去。明治二十四年(1891)には、福岡県尋常中学修猷館教諭(兄で養父の公毅が修猷館内にあった福岡師範学校で校長を勤務していた為か)、明治二十六年(1893)に、福岡英和女学校教頭を歴任。明治二十六年(1893)、長崎に残る叔父.土橋冨蔵(冨蔵が兵衛の養子となったことにより兄でもあった)が死去。明治二十九年(1896)、長崎に帰郷し長崎市内のミッション系改革派教会の私立東山(ﾄｳｻﾞﾝ)学院教諭のち教頭(東山学院神学部は 1902 年に明治学院大学と合併さる、校舎はグラバー園内に移築)、明治三十二年(1899)、長崎私立英和学校校長を勤務(東山手オランダ坂の外国人居住区にあった、のち英和学校は原爆のため校舎が壊滅し諫早に移転、鎮西学院となる)。明治三十三年(1900)、長崎県平戸私立猶興館(のち県立)教諭(同時期に土橋安次郎・ムマ・清英も平戸に在住)。同年、次男.静雄生誕。明治三十五年(1902)、内閣総理大臣.桂太郎により長崎県立猶興館教諭を退任し福井県立福井農学校校長に任じらる。大正二年(1913)、内閣総理大臣.山本権兵衛より熊本県技師を退任し山口県技師に任じられ従六位を賜る。兄.公毅(戸籍上養父)の長男が早死した為その子.確三を養子とす。大正五年(1916)、55 歳没。墓所.東京上野谷中墓地。

※ 妻.愛子(ｱｲ)、昭和十六年(1941)、71 歳没

※ 土橋豹四郎 (橘彪四郎)の子息 (兵衛の孫)(14 代)：

長男.信作 橘家相続人、長崎にて出生、同志社大学卒、満州にて満州鉄道に勤務、キリシタンであった。信作の子息：長男.信彦(満州にて生誕)と次男.保彦(ﾔｽﾋｺ. 信作が満州から帰国後日本にて誕生)および一女あり。信彦の娘.某(存命)により 2021 年頃、谷中霊園の乙 12 号 4 番の一番奥にあった橘家墓所は同第 2 区立体埋蔵施設東側 1 側 8 番へ改葬さる。二男.静雄、明治三十三年(1900)長崎にて出生、同志社大学卒、作曲家として NHK や朝日放送に長年関係し交響曲や協奏曲を作曲、また相愛学園で音楽を教諭、全国各地の学校校歌を多数作曲、平成五年(1993)、長崎にて 93 歳没。(静雄の子息：愛治、同志社本部財務部長(愛治の子息：男子三名が存命)。三男.確三 、公毅長男の子(公毅の孫)で彪四郎の養子となり明治 34 年(1901)、長崎より渡米し帰国後名古屋で死去、未婚。長女.利子(小野家に嫁し京都居住)。次女.富美子。

↓

13 代 土橋晋助/剛三郎/冨蔵 (文政八年、1825～1893) 江戸/明治時代

橘姓 37 代。幕末の志士。作左衛門英彦四男.土橋晋助、眞一、晋一、晋一郎、四郎治、公武、橘公武とも。のち兄.兵衛の養子三男.剛三郎となり、明治六年(1873)に分家し土橋冨蔵となる。槍術を習得し江戸へ出府、山本無辺流より免許皆伝を授かる。嘉永六年(1853)、無辺流槍取立、安政元年(1854)、藩主親衛隊.二十騎馬副(ｹﾞｴ)の頭取となる。元治元年(1864)、三十九歳の時、北村孫八の二女キクと婚姻し井石家領地の下岳村(西彼杵郡亀岳村大字下岳五十七番)に居住。目の前の大村湾には先祖の姓(橘)から名付けられた橘島あり(現在.長崎県西海市西彼杵町白崎郷)。慶応二年(1866)、長男.虎蔵誕生。同年、新精組に選抜さる。慶応三年(1867)、四十二歳の年、新精隊に選抜され上洛し東征軍の先鋒として戊辰戦争を歴戦。東北では薩摩軍の救援にあたった際に重創(重傷)を負う。戊辰の役に於いて勇戦重創を蒙り目録七十両を藩主より賜る。明治六年(1873)、大村八番戸より分家。同時期、一族のうち兄で養父でもある兵衛(橘公臣)、甥で兄弟でもある兵馬(橘公穀)と豹四郎(橘彪四郎)の一家が東京府へ上京(兵衛はより早い時期に上京した可能性もある)。養子に出た兄弟(勘治郎、雄三郎包清、六郎次公敏、兵衛次男.斎二郎公干)を除き長崎に残るのは剛三郎/冨蔵のみとなる。冨蔵の嫡男.虎蔵も同時期に上京したものと思われる。1880 年代、上京した兵衛(公臣)、兵馬(公穀)、そして自子.虎蔵を相次いで彼の地で失う(ともに墓所:上野谷中霊園)。虎蔵死去に

より、婿養子に奈良崎平吉四男.安次郎を迎え長女.ムマが家督を相続。明治二十六年(1893)、68 歳没。1896 年、甥の彪四郎が長崎に帰郷。※ 妻.キク(キク子、天保十三年、1842 年生)、明治三十年(1897)、55 歳没。

※ 土橋冨蔵の子息(兵馬作左衛門英彦の孫)(14 代):

長男.虎蔵/虎一(慶応二年、1866～1885) 十六歳より東京に遊学し橘家に居遇。医学修学中脚気衝心により 18 歳没。上野谷中の橘家墓地に埋葬、1964 年 1 月、長崎土橋家墓地へ改葬。

長女.ムマ (下記に詳細を記す)

↓

14 代 土橋ムマ (明治七年、1874～1953) 明治/大正/昭和時代

橘姓 38 代。戸主.ムマのち夫.安次郎。長兄.虎蔵死去により土橋家を相続。山口県下関(山口県豊浦郡長府村、本籍.山口県赤間関市)より奈良崎平吉四男.安次郎(慶応元年、1865 生)を婿養子に迎うる。長崎県西彼杵郡亀岳村大字下岳白崎郷 767 番に居住。安次郎が設計士として長崎県庁に勤めた関係で、北松浦郡平戸町に居住(1900 年前後のことで、ムマの従兄である橘彪四郎も同じ時期に平戸.猶興館に勤務。ムマの長男.清英が七歳の頃。のち清英も猶興館に進学す)。のち、安次郎の転勤により南松浦郡福江町(五島)、下県郡厳原町(対馬)、長崎市上筑後町、長崎市稲佐町に居住。長崎市千馬町二丁目二番(現在.出島町 11-12)にて土橋工務店を創業し同地に居住。ムマは当時としては珍しく煙管をやって威厳があったという。安次郎、昭和十一年(1936)、72 歳没。ムマ、昭和二十八年(1953)、78 歳没。安次郎、ムマともに長崎の土橋家墓地に埋葬。

※ ムマ、安次郎の子息(15 代):

長男.清英。次男以下夭折す。次男から順に正臣、義哉、隆公、晋毅、忠亥、光二、英章。

↓

15 代 土橋清英(ｷﾖﾌｻ) (明治二十六年、1893～1980) 明治/大正/昭和時代

橘姓 39 代。長崎県立猶興館中学校(中高一貫旧制中学校)から、大正二年(1913)、早稲田大学理工科予科入学(理工科は開設当初で、1920 年の大学令で認可され旧制早稲田大学となり

理工学部に改称。早稲田大学は、校長を大隈重信としフルベッキが教授した長崎五島町の佐賀藩英学校を前身とす)。帰崎後、長崎県知事官房、三菱造船所建築課、長崎市土木課、水道課に勤務。長崎市職員を集め野球チームを創設するなどハイカラな面もあった。大正十三年(1924)、菊岡家.菊岡伊勢治の娘.清と婚姻(厳原町王字今屋敷 767 番地の名家、菊岡家墓：対馬厳原町海岸寺)。昭和十一年(1931)、父.安次郎死去につき千馬町の土橋工務店を継承。計量設計、建設コンサルタント業で成功し愛宕の土地を買い屋敷を複数所有。戦時中、米軍機の爆撃により市中が大火となることを恐れ、軍部の政策により長崎市の中心地が倒壊され家屋が間引きされる(建物疎開)。千馬町の土橋工務店もこれにより取り壊される。長崎市愛宕四丁目の屋敷に居住。脊椎カリエスの為寝たきりとなり困窮し、愛宕四丁目の屋敷から愛宕二丁目のムマ宅に移居。愛宕の山、不動産を売却し生計に充てる。儒教の書物を愛読し真理を書に記す。晩年も野心精気ともに衰えず。昭和五十五年(1980)、87 歳没。※ 妻.清、明治三十四年(1901)生まれ、平成十七年(2005) 105 歳没。

※ 土橋清英(ｷﾖﾌｻ)の子息(16 代):

長男.勢至(ｾｲｼ)、長崎県税事務所部長。

二男.弘基(ｺｳｷ)、長崎医科大学医学専門部就学中原子力爆弾により被爆し七日後 19 歳で死去。
※ 長崎医科大学は、当時長崎県内唯一の大学で長崎大学医学部の前身。

三男.長久(ﾅｶﾞﾋｻ)、長崎市東京事務所所長、自民党長崎支部長。

四男.道良(下記に詳細を記す)

↓

16 代 土橋道良(ﾐﾁﾅｶﾞ) (昭和十四年、1939～2024) 昭和/平成/令和時代

橘姓 40 代。出島復元整備室初代室長、長崎市商工観光部長、長崎国際観光コンベンション協会理事長。妻は山喜鉄工所社長.山下清の娘.時代。長崎市千馬町に生誕、愛宕町にて育つ。婚姻後、八幡町龍馬通り下の割烹山川荘左斜め前.山下家の隣宅に居住、のち女の都二丁目に居住。登山家でもあり長崎岳人会に所属。1968 年 12 月 27 日より 1969 年 1 月 17 日の予定で三隊九名を指揮し槍ヶ岳から穂高岳までの厳冬期縦走山行に入る。12 月 30 日に上高地着、1 月 3 日から風雪が吹き始める、1 月 8 日、地吹雪で奥穂高岳と前穂高岳の谷、岳

沢約1040～1050米付近で停滞、夜の22時10分、大規模な雪崩に遭遇しテントごと滑落。他の三名は500米程流され停止したが道良はテントの奥に寝ていた為700～800米程滑落。「アッ、やられたな」と思った瞬間2、3回目から火花が出る。蘇生した時刻は23時40分、他の隊員の捜索を開始、靴が無い為足に灌木をタオルで結びつけ歩き出す、暗く雪が降る中足元もはっきり見えない、午前0時15分、一名を捜し出すが負傷の為動けずヘッドランプを借り寝袋のまま森林帯の深部へ引き摺り雪面をL字に踏み固め寝かせる、またコールをしつつ他の二名を懸命に捜索、辺りが白みかかった頃の午前6時10分、デブリ上で一名を発見するが体が寝袋から出ており呼吸が無い、一人では動かすことができず生存する一名にその報を告げ、午前6時30分、木村小屋へ救援を求めに下る、靴も履いておらず森林帯はトレースが無く難航するが午前9時30分頃に木村小屋に着く、事情を説明し電話を借り長崎へ連絡、救助隊五名を連れて現場へ戻る、一名の生存者を収容、一名の遺体を収容していた時に残りの一名の遺体を発見、下山する。1月14日、帰崎し二名の御通夜に参列、足の指とカカト凍傷につき1月16日より1月30日まで長崎大学附属病院に入院。(以上長崎岳人会遭難報告書より抜粋、子.省吾記)。長崎市は、長崎出島を復元する際、設計を担当した東京の教授に断られたため市には秘密裡に上京し個人的に教授を説得。頓挫した計画を再開させた。また、文化庁に足繋く通い出島復元の認可を得たという(妻.時代談)。市役所を退職後、北アルプスでの隠居生活を夢見ていたが、長崎国際観光コンベンション協会理事長を数年勤務し同協会を退職後、念願の北アルプスにて隠居。妻.時代と共に長野県大町市大町神栄町に居を構え二十余年北アルプスと長崎を往来す。アルパインクライマーの谷口けい氏、平出和也氏等が北アルプス登頂の際、土橋宅に宿泊することもあったという。登山の傍ら大自然を写真に残す。東京ミッドタウン富士フィルムでの写真展に選出され、長崎万屋ギャラリー等にて北アルプスの個展を多数開催。夫婦ともに七十歳を過ぎるまでアルプス山脈、アンデス山脈、ヒマラヤ山脈などを登山、八十歳を過ぎ健康を理由に長崎に帰郷。令和六年(2024)七月六日、84歳没。

※ 八幡町について：

生家の辺りには、長崎甚左衛門純景の居城.桜馬場城跡、坂本龍馬拠点.亀山社中、ノーベル文学賞受賞カズオ・イシグロ生家、眼鏡橋、興福寺、渋江家の水神神宮があった。水神神宮は1624年、同族.橘姓渋江氏15代当主.渋江公師(ｷﾐﾓﾛ)の三男.公延が創建した 。橘家は三代の橘島田磨より代々水神を氏神とし

て祀っており、 渋江家の水神神社でも伊良林から八幡町に注がれた湧き水を祈願するようになった。その水流は地中の木樋水道で長崎 38 ヵ町に配水されるようになり、寛永七年(1667 年)から 200 年以上の間利用され長崎町民はこの水道により多大の利便を受けた。水神神社は 1700 年代中頃には浦上で生産された羊毛で日本初の羊毛織物を製造していたとも言われている。また、1807 年、八幡町の大神甚五平は、伊良林に亀山焼の登り窯を造設し亀山焼を始める。慶応元年(1865)に廃窯となった登り窯の下手にあった工場跡を龍馬等亀山社中に貸し与えたとされている。現在は亀山社中跡として一般公開されている。龍馬通りの下の通りも当時はまだ石畳で雨が降 ると石の表面が輝きいい匂いがした。溝を流れる心地よいせせらぎの音も思い出される。今では龍馬通りと呼ばれ人気になった坂道も、当時は山手に住む者たちが途中で小便をするので小便坂とも呼ばれていた。我々が 子供の頃よく遊んだ長崎の坂だ。龍馬が毎日昇り降りした坂道、小便坂。よい思い出である。

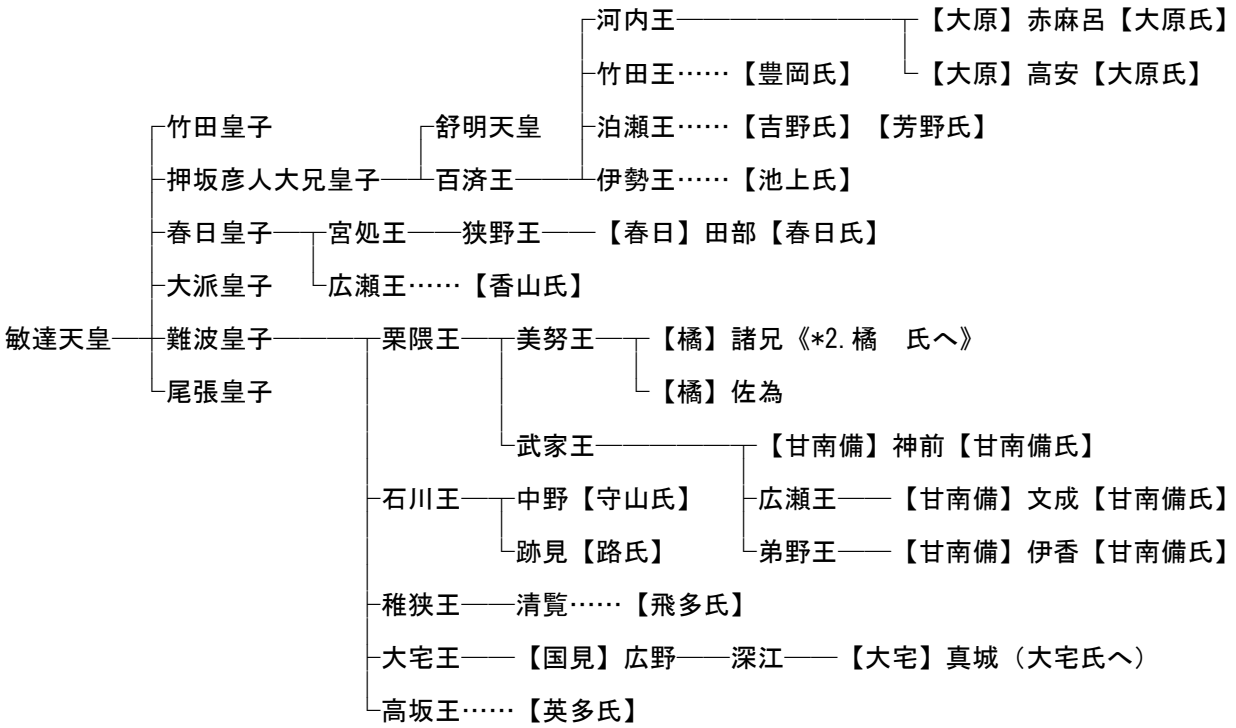
※ 土橋道良の子息(17 代)：

長男.省吾 (昭和四十五年、1970 生)、橘姓 41 代。長崎市八幡町に生誕。長崎北高卒、1991 年より渡米、バルークカレッジ卒、高校時軟式庭球部主将、高校総体準優勝、インターハイ出場。ニューヨーク並びに長崎にて旅行会社を経営。

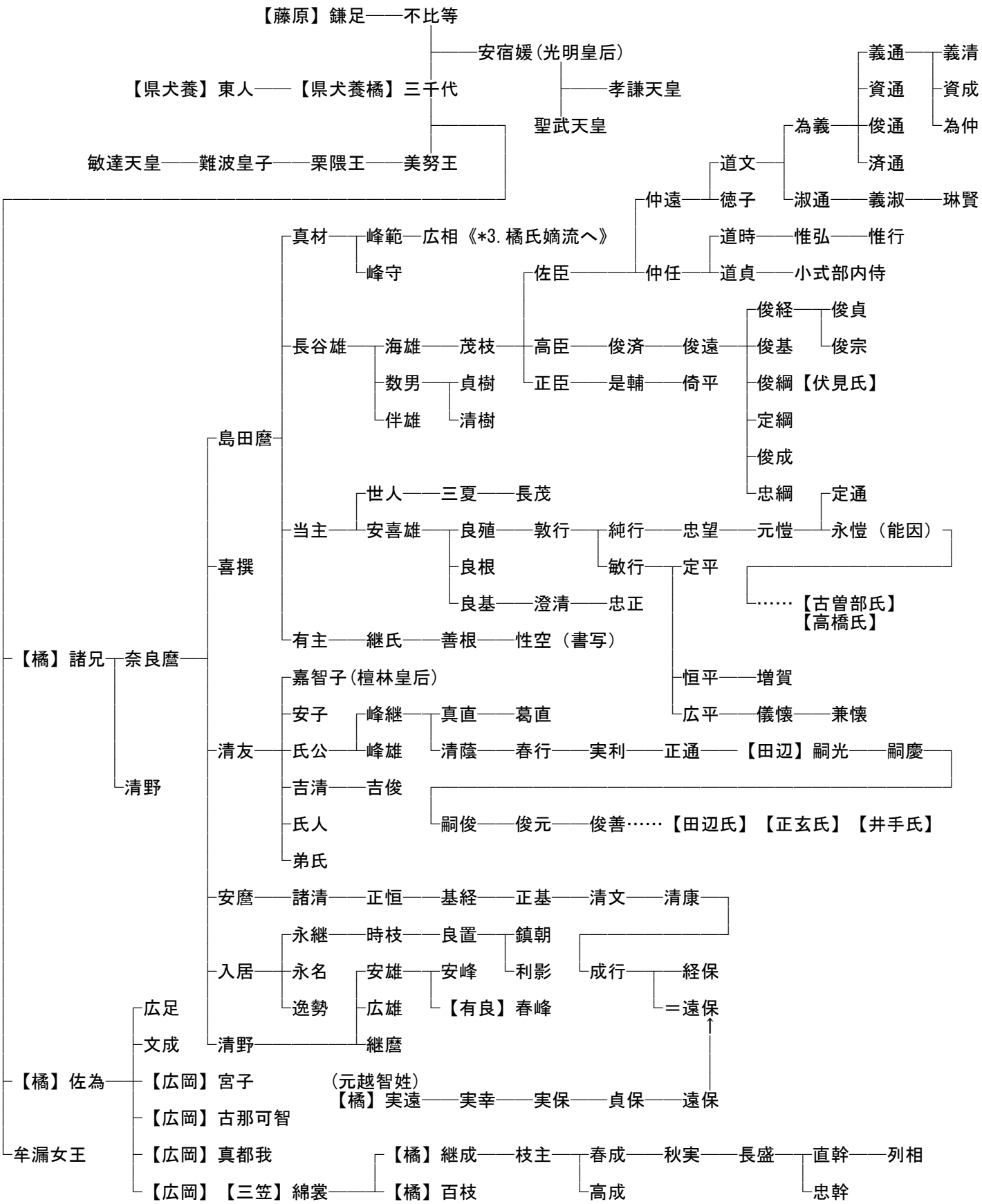
次男.某(存命)(昭和四十九年、1974 生)、橘姓 41 代。長崎西高卒、静岡大学卒、埼玉県浦和市居住。

【 橘姓　橋氏　家系図 】

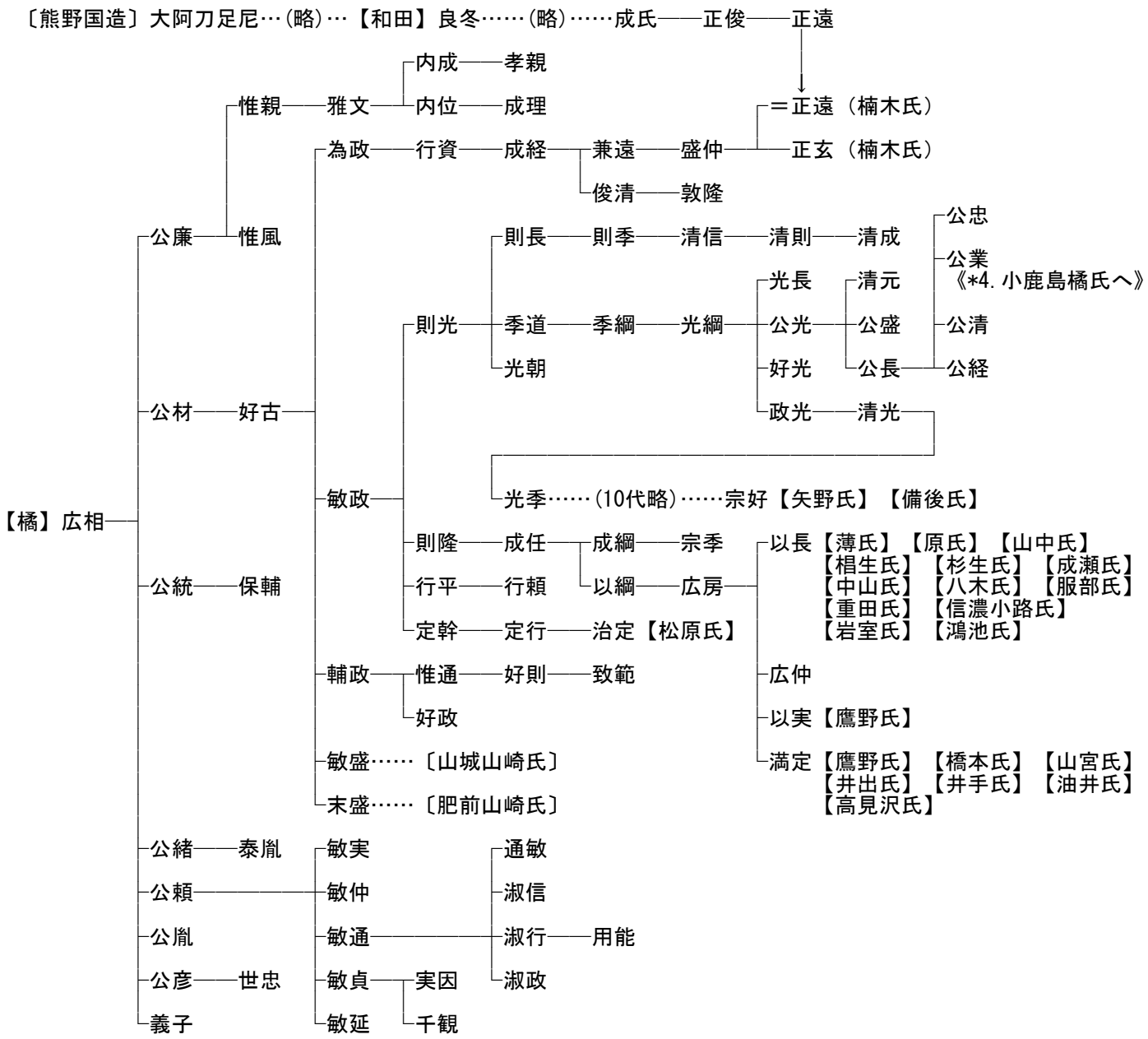
《*1.敏達帝裔氏族綱要》



《*2.橘　氏》


【藤原】鎌足
不比等
安宿媛(光明皇后)
孝謙天皇
聖武天皇
【県犬養】東人
【県犬養橘】三千代
敏達天皇
難波皇子
栗隈王
美努王
義通
義清
資通
資成
俊通
為仲
為義
済通
道文
淑通
義淑
琳賢
仲遠
徳子
真材
峰範
広相《*3.橘氏嫡流へ》
峰守
道時
惟弘
惟行
佐臣
仲任
道貞
小式部内侍
俊経
俊貞
長谷雄
海雄
茂枝
高臣
俊済
俊遠
俊基
俊宗
数男
貞樹
正臣
是輔
倚平
俊綱【伏見氏】
伴雄
清樹
定綱
島田麿
俊成
世人
三夏
長茂
忠綱
定通
当主
安喜雄
良殖
敦行
純行
忠望
元愷
永愷（能因）
喜撰
良根
敏行
定平
良基
澄清
忠正
……【古曽部氏】
【高橋氏】
有主
継氏
善根
性空（書写）
【橘】諸兄
奈良麿
嘉智子(檀林皇后)
恒平
増賀
安子
峰継
真直
葛直
広平
儀懐
兼懐
氏公
峰雄
清蔭
春行
実利
正通
【田辺】嗣光
嗣慶
清友
清野
吉清
吉俊
氏人
嗣俊
俊元
俊善……【田辺氏】【正玄氏】【井手氏】
弟氏
安麿
諸清
正恒
基経
正基
清文
清康
永継
時枝
良置
鎮朝
入居
永名
安雄
安峰
利影
成行
経保
逸勢
広雄
【有良】春峰
＝遠保
広足
文成
清野
継麿
【橘】佐為
【広岡】宮子
(元越智姓)
【橘】実遠
実幸
実保
貞保
遠保
【広岡】古那可智
牟漏女王
【広岡】真都我
【橘】継成
枝主
春成
秋実
長盛
直幹
列相
【広岡】【三笠】綿裳
【橘】百枝
高成
忠幹

《*3. 橘氏嫡流》


〔熊野国造〕大阿刀足尼…(略)…【和田】良冬……(略)……成氏——正俊——正遠
内成——孝親
惟親——雅文——内位——成理
＝正遠（楠木氏）
為政——行資——成経——兼遠——盛仲——正玄（楠木氏）
俊清——敦隆
公廉——惟風
則長——則季——清信——清則——清成
公忠
公業
《*4. 小鹿島橘氏へ》
光長
清元
則光——季道——季綱——光綱——公光——公盛
公清
光朝
好光
公長——公経
公材——好古——
政光——清光
光季……(10代略)……宗好【矢野氏】【備後氏】
【橘】広相——
敏政——
則隆——成任——成綱——宗季
以長【薄氏】【原氏】【山中氏】【椙生氏】【杉生氏】【成瀬氏】【中山氏】【八木氏】【服部氏】【重田氏】【信濃小路氏】【岩室氏】【鴻池氏】
公統——保輔
行平——行頼
以綱——広房——
定幹——定行——治定【松原氏】
広仲
輔政——惟通——好則——致範
好政
以実【鷹野氏】
敏盛……〔山城山崎氏〕
満定【鷹野氏】【橋本氏】【山宮氏】【井出氏】【井手氏】【油井氏】【高見沢氏】
末盛……〔肥前山崎氏〕
公緒——泰胤
敏実
通敏
公頼——敏仲
淑信
公胤
敏通——淑行——用能
公彦——世忠
敏貞——実因
淑政
義子
敏延——千観

《*4.小鹿島橘氏》

- 【小鹿島橘】公業
  - 公益――公瞭――公景――公定
    - 公村――公宗
      - 公弘
      - 公康――公勝
      - 公平
  - 公真――公政――公則――公信
    - 公親
    - 公清――公秀
      - 公元
      - 大進房
      - 公晴
  - 公行――公持――公方
  - 公基――公時――公宗
  - 公友――公重――公時――公仲――公通――公勝
    - 公名――公久
    - 公厚
    - 公俊――公範――公広
    - 公高――公時
    - 公政
  - 公俊――公季――公秀――公春
    - 公則
    - 公澄――公宜
  - 公義
    - 【渋江】公村――公遠――公経――公重【渋江氏】【佐渡氏】【大村氏】
      - 公多
      - 公次【大崎氏】
    - 【牛島】公茂【牛島氏】
      - 公行【上村氏】
    - 【中村】公光【中村氏】【三隈氏】【片峰氏】【野副氏】【東福寺氏】
    - 【中橋】時成――公幸――公森――公弘
      - 公景――公玄――公成――【土橋】公貞――公房――【井石】前英――頼次――純成――長廣
      - 公通
      - 舎人公祐―【中尾】公清―【深澤】義太夫勝清
  - 公員――公綱――公民
    - 公能
    - 公資
    - 公持――公政――公家
    - 公兼
      - 公連
      - 公明――公重
    - 公澄――公勝
  - 公春――公久――久持――信房――貴英――英清――英淳――英俊――英彦――英章――【土橋】冨蔵――安次郎――清英――道良
    - 【橘】公毅――彪四郎――信作――信彦
      - 静雄――愛治
  - 省吾

橘氏、掛橋氏、中橋氏、土橋氏、井石氏の方がいらっしゃいましたらご連絡下さい

土橋省吾　dseigoアットマークgmail.com

2024年12月記